

平成30年度考古学ゼミナール

戦いの考古学

神奈川県埋蔵文化財センター

「戦い」の考古学

日程 ※各講の後に質疑・休憩

開講式	10月14日(日)	13:00~13:10
第1講	同	13:10~14:40
第2講	同	15:00~16:30
第3講	10月21日(日)	13:00~14:30
第4講	同	15:00~16:30
第5講	11月4日(日)	14:00~16:00
修了式	同	16:20~16:30

要旨集 目次

講師紹介	・・・2
講義要旨	
第1講 「弥生時代の戦いー傷つける道具と守る施設ー」	・・・3
駒澤大学 准教授 寺前 直人	
第2講 「古墳時代の戦いー武器と武具を読み解くー」	・・・9
文化庁 文部科学技官 川畑 純	
第3講 「考古学からみた古代東北地方の争乱」	・・・25
青山学院大学 准教授 岩井 浩人	
第4講 「中世から近世の戦乱ー築城技術と出土鉄砲玉から考えるー」	・・・31
帝京大学文化財研究所 所長・教授 萩原 三雄	
第5講 「考古学から戦争を考える」	(※当日配布)
国立歴史民俗博物館 教授 松木 武彦	

会場 かながわ県民センター 2階ホール
横浜市神奈川区鶴屋町 2-24-2

講師紹介

寺前 直人 (てらまえ なおと) 駒澤大学 准教授／博士 (文学)

大阪大学大学院 駒澤大学講師を経て現職

著作：『武器と弥生社会』大阪大学出版会、『文明に抗した弥生の人びと』吉川弘文館 (単著)、『ジュニア日本の歴史1 国のならたち』小学館 (共著) ほか多数

川畑 純 (かわはた じゅん) 文化庁 文部科学技官／博士 (文学)

京都大学大学院 奈良文化財研究所を経て現職

著作：『武具が語る古代史 古墳時代社会の構造転換』京都大学学術出版会、「古墳時代中期における甲冑の配布と入手の一樣相」『古代武器研究』10、「衝角付冑補論」『奈良文化財研究所 文化財論叢IV』(単著) ほか多数

岩井 浩人 (いわい ひろと) 青山学院大学 准教授／博士 (歴史学)

青山学院大学大学院 青山学院大学助教を経て現職

著作：「津軽南域における古代の土器様相」『扶桑』田村晃一先生喜寿記念論文集刊行会、「野尻遺跡群における竪穴住居の規模構成の変移」『青山考古』28、「東北北部における古代末期環壕集落の構造と規模」『青山考古』33、「古代末期環壕集落の成立過程」『古代文化』70-1 (単著) ほか多数

萩原 三雄 (はぎはら みつお) 帝京大学文化財研究所 所長・教授

早稲田大学 (公財) 山梨文化財研究所を経て現職

著作：『中世の城と考古学』新人物往来社、『中世城館の考古学』高志書院、『戦国時代の考古学』高志書院、『鎌倉時代の考古学』高志書院、『日本の金銀山遺跡』高志書院 (編著)、「財産目録からみた陶磁器の所有」『貿易陶磁研究』15 (単著) ほか多数

松木 武彦 (まつぎ たけひこ) 国立歴史民俗博物館 教授／博士 (文学)

大阪大学大学院 岡山大学教授を経て現職

著作：『人はなぜ戦うのか』講談社選書メチエのち中公文庫、『日本列島の戦争と初期国家形成』東京大学出版会、『全集 日本の歴史 1 列島創世記』小学館、『進化考古学の大冒険』新潮選書、『古墳とはなにか』角川選書、『美の考古学』新潮選書 (単著) ほか多数

弥生時代の戦い — 傷つける道具と守る施設 —

寺前 直人 (駒澤大学 准教授)

はじめに

1. 弥生時代以前の戦い

①定義

- ・武器と狩猟具・対人と対獣・・・考古学者はどのように二つを区分しているのか？
- ・暴力・戦い・戦争
- ・直接武器と間接武器 短兵・長兵・匂兵
- ・使わざる武器・・・武器の象徴性・武器形祭器をめぐって

②縄文時代の人々は「harmless」(害なき)な人々なのか？

- ・アフリカ現代社会の狩猟採取民(ブッシュマン)をめぐる議論
- ※定住性・技術の進歩・西洋入植者文化との接触

③類人猿の戦い

- ・動物の戦い・・・チンパンジーとボノボ

④旧石器時代・縄文時代の武器・・・ヤリ・ヤジリ(弓矢)・斧(棍棒)

⑤縄文時代の防御施設・・・北海道苫小牧市静川遺跡A地区(縄文時代中期末)

2. 弥生時代に登場する傷つける道具

①在来系の武器・・・ヤジリ(打製石器)・ヤリ(打製石器)・斧(磨製石器)

②外来系の武器短剣・・・短剣(石製・金属製)・矛(金属製)・戈(石製・金属製)

③防具の登場・・・持盾(木製)とヨロイ(木製)

3. 弥生時代にみられる守る施設

①環濠集落(溝に囲まれた居住空間への集住)・・・弥生時代早期以降の拡大と変化

- ・弥生時代早期・・・玄界灘沿岸地域(福岡県那珂遺跡・江辻遺跡)
- ・弥生時代前期・・・鹿児島県入来遺跡～愛知県高蔵遺跡
- ・弥生時代中期・・・鹿児島県～道庭(千葉県) ※逆茂木の存在(愛知県朝日遺跡)
- ・弥生時代後期・・・～山元遺跡(新潟県)

- ②高地性集落…定義の困難さ→「低地性」遺跡⇔「高地性」遺跡(森本 1933)、「各地で、高い山頂や丘陵の頂とか、山腹や斜面の急な高い台地や砂浜などのような、水田 経営に不適當か不可能な場所にも」集落の存在(小野 1953 : p.108)

4. 武器・武具の発展における地域差

①弥生時代前期(BC 8～)

- ・北部九州(佐賀・福岡)地域
 - …外来系石製武器と武器副葬被葬者を中心とした葬制の芽生え
- ・中部瀬戸内(岡山・香川)～近畿中部地域(兵庫南部・大阪・京都南部・奈良北部)
 - …外来系武器文化の非定着性と変質

②弥生時代中期(BC 4～)

- ・著しい地域差・多様な素材(石・木・骨・青銅・鉄)と機能をもった武器類
- ・武器形祭器の発達

④弥生時代後期(AD 1～)

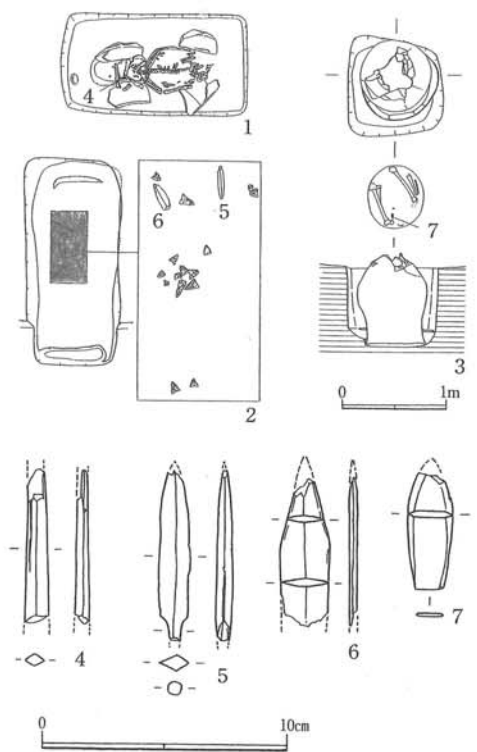
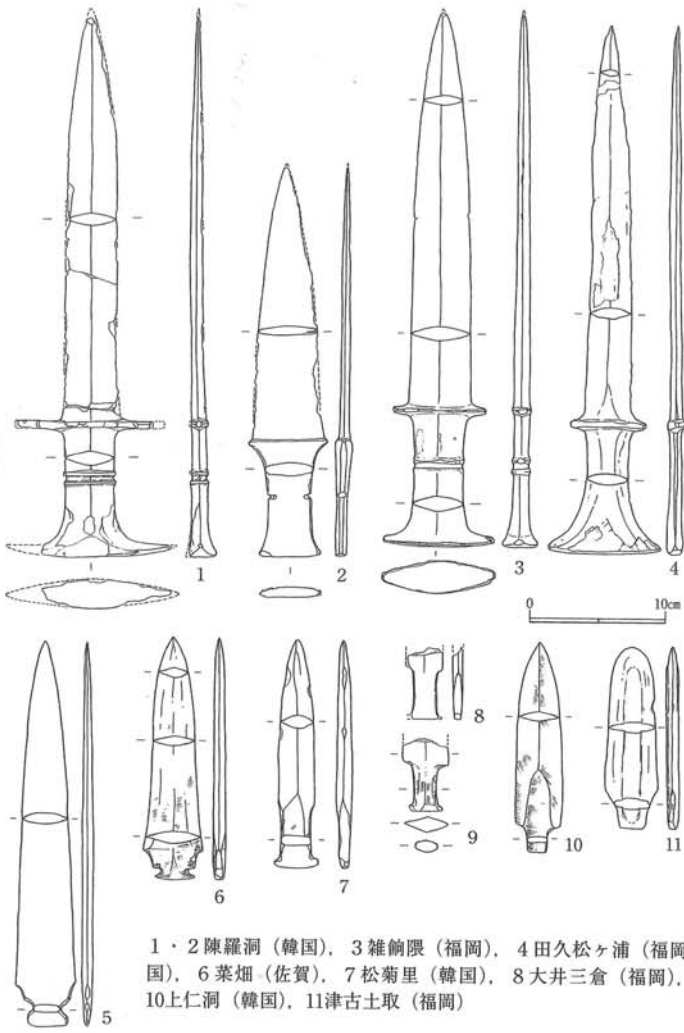
- ・石製武器の減少
- ・東日本への鉄製武器拡大

おわりに

【参考文献】

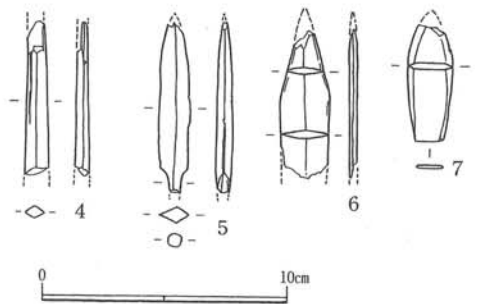
- 内野那奈 2013 「受傷人骨からみた縄文の争い」 『立命館文学』 633、立命館大学人文学会
- 菅原和孝 1998 「平等主義社会における暴力ブッシュマンの「神話」と現実」 『暴力の人類学』 京都大学人文科学研究所共同研究報告、京都大学出版会
- 寺前直人 2010 『武器と弥生社会』 大阪大学出版会
- 寺前直人 2017 『文明に抗した弥生の人びと』 吉川弘文館
- トーマス、E・M1977(荒井喬・辻井忠男訳) 『ハームレス・ピープルー原始に生きるブッシュマン』 海鳴社
- 春成秀爾 1999 「武器から祭器へ」 『人類にとって戦いとは』 1、東洋書林
- 藤原 哲 2018 『日本列島における戦争と国家の起源』 同成社
- 松木武彦 1996 「中四国・近畿・東海の戦いの始まり」 『倭国乱る』 図録、朝日新聞社
- 松木武彦 2001 『人はなぜ戦うのかー考古学からみた戦争ー』 講談社選書メチエ、講談社

図版出典：①～③寺前 2010・2017、④春成 1999・藤原 2018 をもとに作成、⑤松木 1996



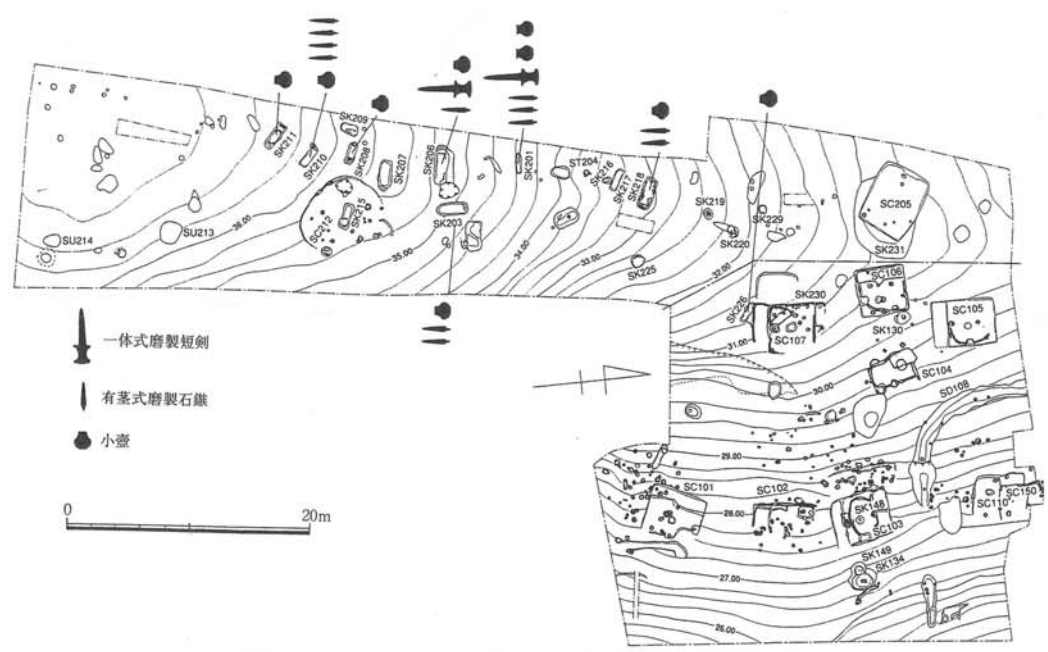
1 新町遺跡24号墓 (福岡), 2 三国の鼻遺跡6号木棺 (福岡), 3 曲り田遺跡2号甕棺 (福岡)

②武器として使用された磨製石鏃

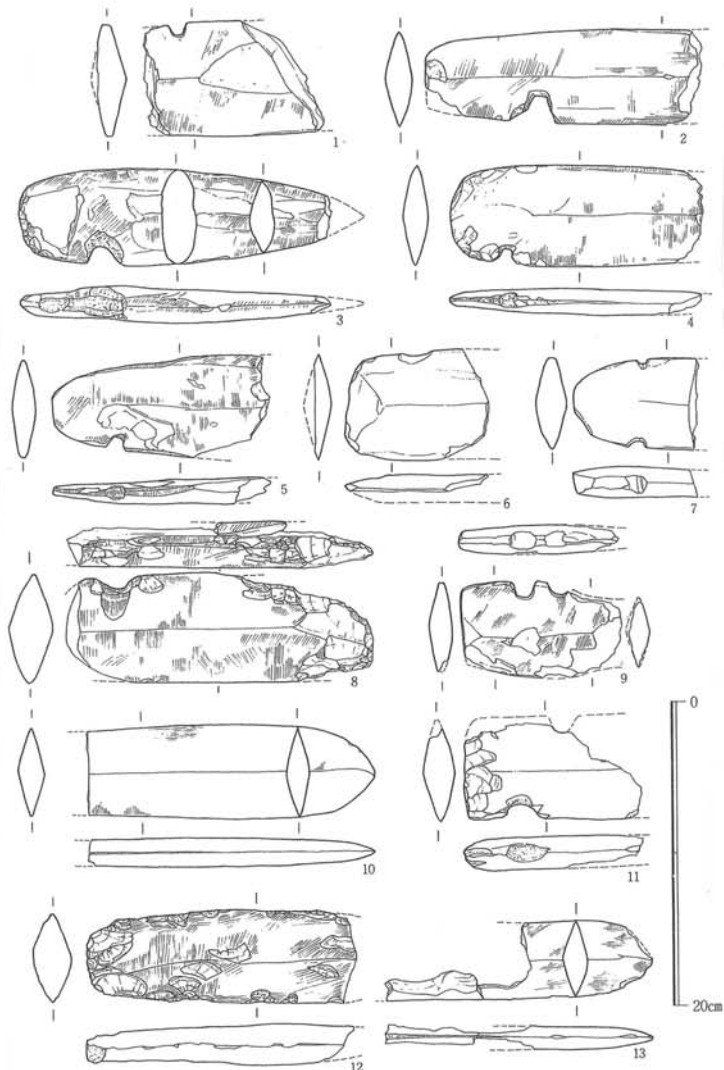


1・2 陳羅洞 (韓国), 3 雑餉隈 (福岡), 4 田久松ヶ浦 (福岡), 5 月城里 (韓国), 6 菜畑 (佐賀), 7 松菊里 (韓国), 8 大井三倉 (福岡), 9 雀居 (福岡), 10 上仁洞 (韓国), 11 津古土取 (福岡)

①朝鮮半島と北部九州地域の磨製短剣(上段：一体式・下段：組合式)

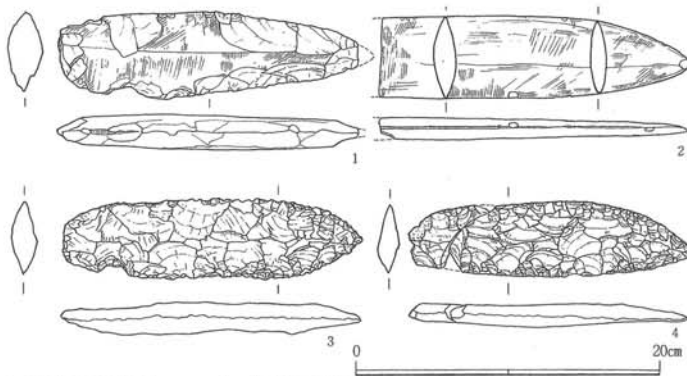


③弥生時代前期墓域における武器(福岡県田久松ヶ浦遺跡)



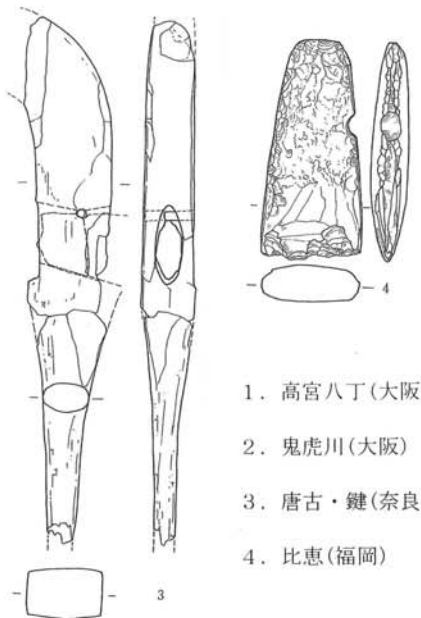
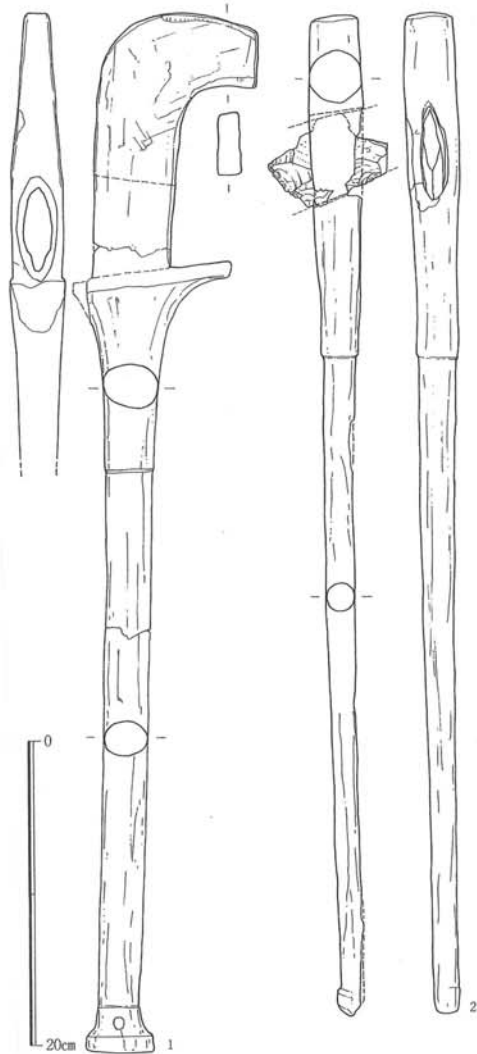
1. 松本 (福岡県) 2. 下稗田 (福岡県) 3~5. 高槻 (福岡県) 6. 尾崎天神 (福岡県) 7. 天神 (福岡県) 8. 鴨部川田 (香川県) 9. 徳永川ノ上 (福岡県)
10. 太田 (京都府) 11. 南方 (岡山県) 12. 庄蔵本 (徳島県) 13. 玉津田中 (兵庫県)

④目釘式石戈 1



1. 宮ノ下 (大阪府) 2・4. 久宝寺 (大阪府) 3. 唐古鍵 (奈良県)

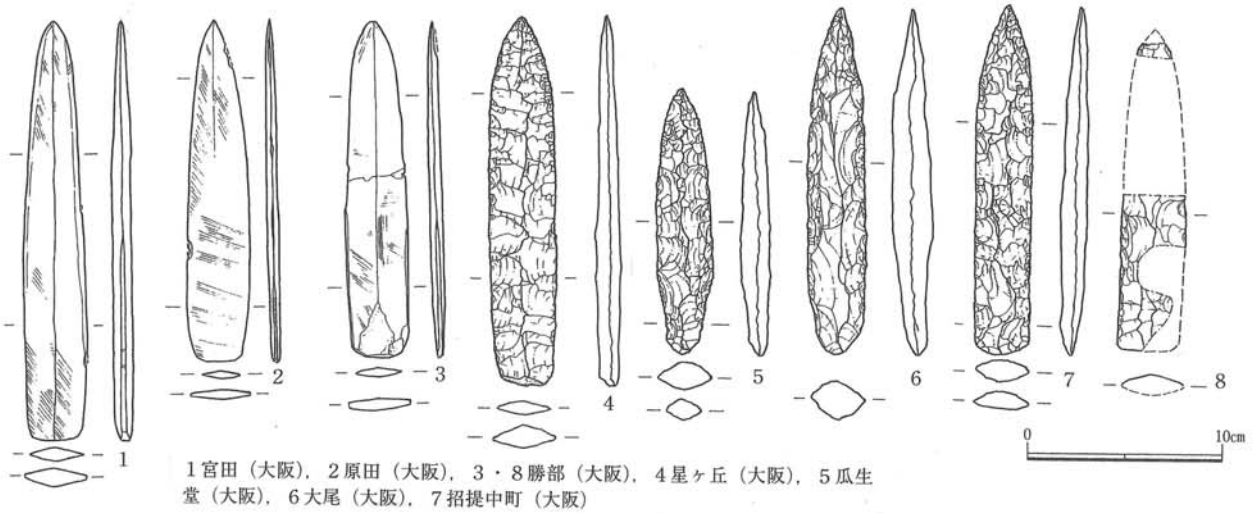
⑤目釘式石戈 2



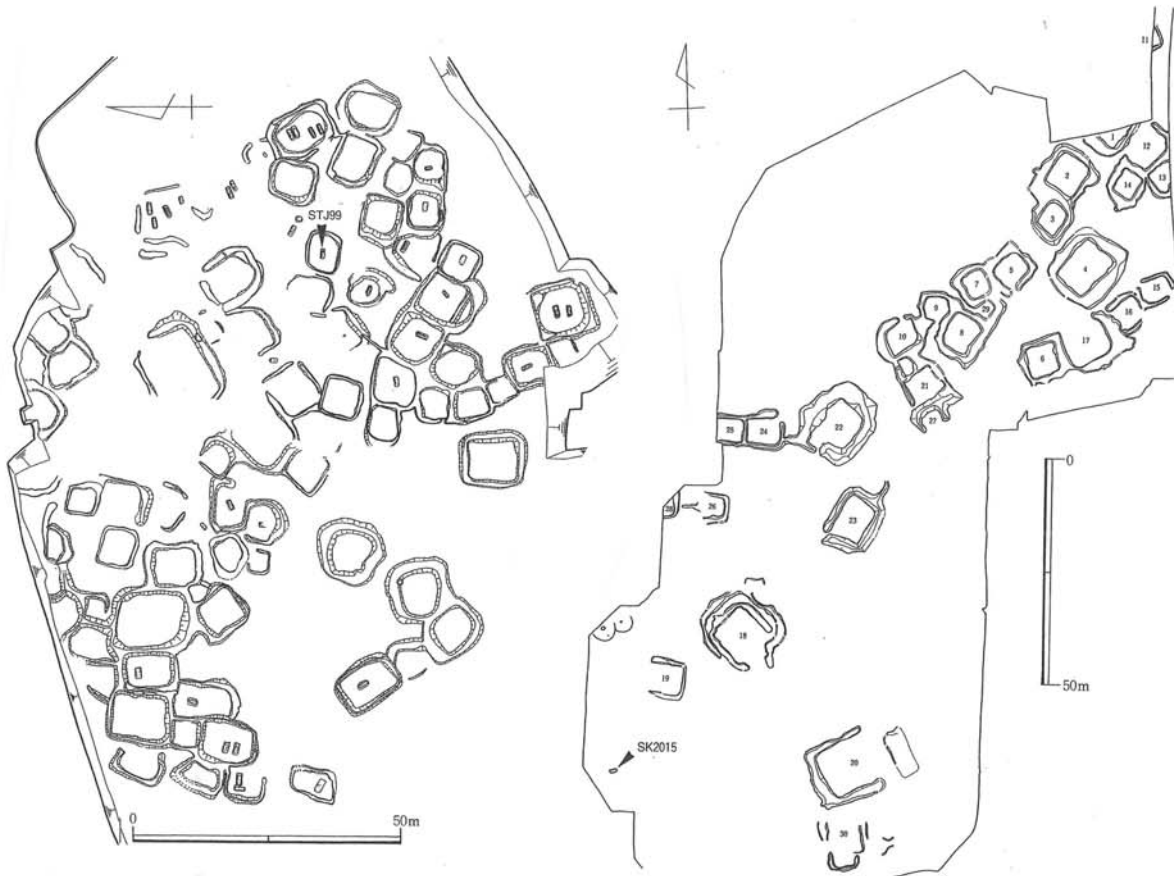
1. 高宮八丁 (大阪)
2. 鬼虎川 (大阪)
3. 唐古・鍵 (奈良)
4. 比恵 (福岡)

⑥目釘式石戈が装着されたとみられる柄と関連資料

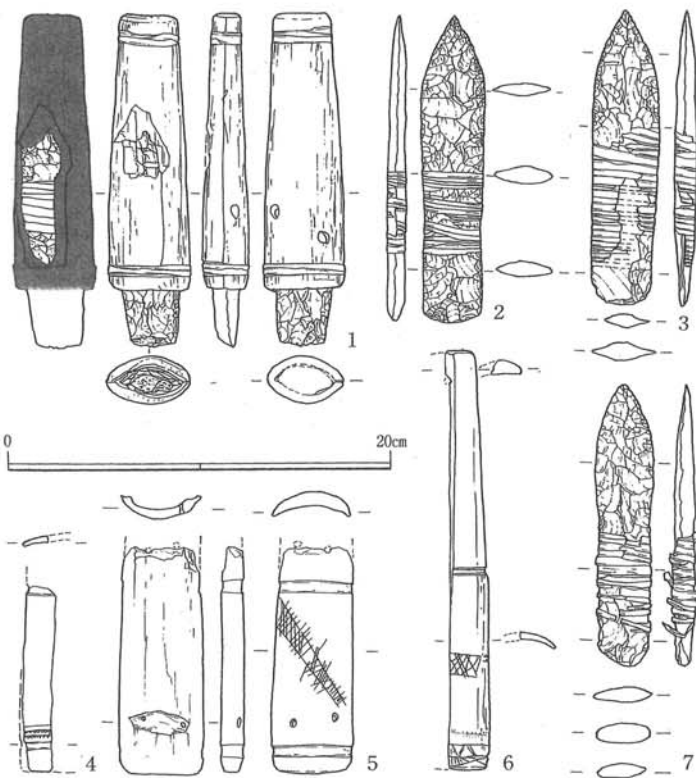
遺跡名	所在	形式	時期	共伴遺物	位置	埋葬施設
下植野南	京都府大山崎町	一体式磨製	中期前半	打製石鏃6・管玉片	方：中心部	木棺
星ヶ丘西	大阪府枚方市	一体式打製	中期後半	なし	方：周辺部	木棺
大尾	大阪府寝屋川市	一体式打製？	中期後半	なし	周溝内	木棺
瓜生堂	大阪府東大阪市	組合式打製？	中期後半	なし	方：周辺部	木棺
勝部	大阪府豊中市	一体式打製	中期後葉	なし	方：周辺部	木棺
勝部	大阪府豊中市	一体式磨製	中期後葉	なし	方：周辺部	土壇墓
原田	大阪府能勢町	一体式磨製	中期後葉	なし	方：周辺部	土壇墓
四ツ池	大阪府堺市	一体式打製	中期	なし	周溝内？	土壇墓
宮田	大阪府高槻市	一体式磨製	中期？	なし	単独	土壇墓
招提中町	大阪府枚方市	一体式打製	前期末～中期中葉	打製石鏃1	単独	土壇墓



⑦ 弥生時代中期の近畿地方における副葬短剣一覧と出土短剣



⑧ 副葬短剣がみられる墓域(左：京都府下植野南遺跡 右：大阪府招提中町遺跡)



⑨打製短剣と木製サヤ

1 唐古・鍵 (奈良), 2 恩智 (大阪), 3~5 鬼虎川 (大阪), 6 瓜生堂 (大阪), 7 玉津田中 (兵庫)



殷後期の図象記号

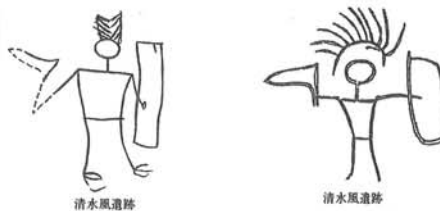
奈良・石上2号鐙



大阪・平野

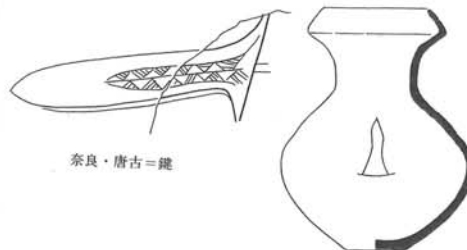
福井・井向1号鐙

佐賀・川寄吉原



清水風遺跡

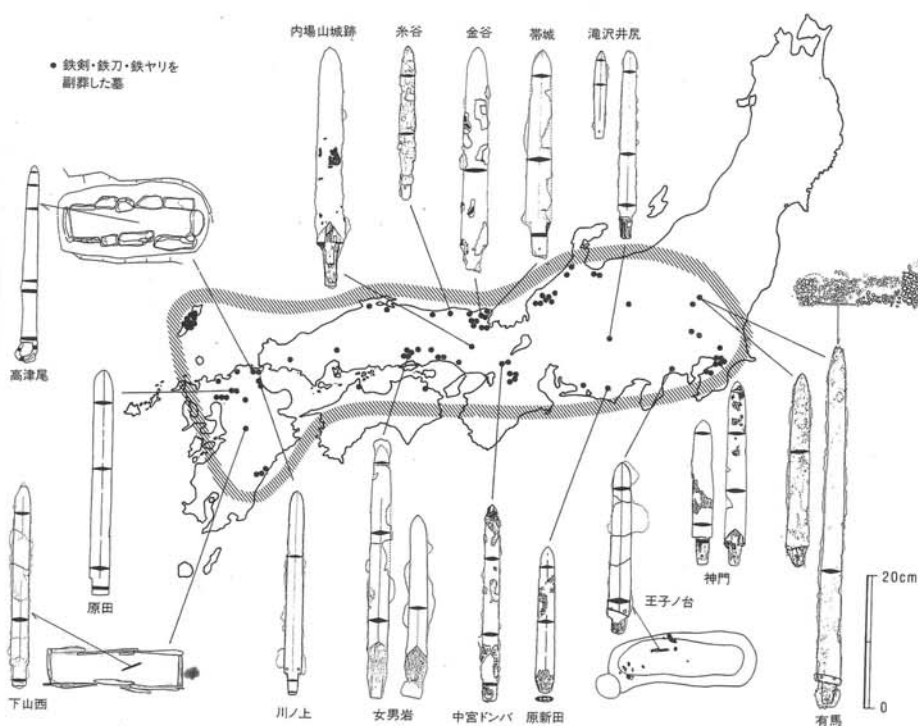
清水風遺跡



奈良・唐古=鍵

長崎・原ノ辻

⑩絵画に表現された武器



● 鉄剣・鉄刀・鉄ヤリを副葬した墓

⑪弥生時代後期(・終末期)における副葬された鉄剣

古墳時代の戦い

—武器と武具を読み解く—

川畑 純 (文化庁 文部科学技官)

1. はじめに—古墳時代とは—

古墳時代はおおよそ3世紀半ばから6世紀末にかけて(7世紀を終末期として含むことも多い)、日本列島の広範囲で大規模な有力者の墓(=古墳)が作られた時代だ。奈良県や大阪府といった近畿地方中央部(のちの畿内)に他地域を圧倒する超巨大な前方後円墳が作られ、その影響は北は東北、南は九州まで及んだ。そのため、畿内の王権が伸展し、各地域の有力者を巻き込んだ階層化・序列化を進展させ、畿内を中心として「国家」へと大きく歩みを進めた時代とされる。

(今回の発表はおおむね、古墳時代前期:3世紀半ばから4世紀後半、古墳時代中期:4世紀末から5世紀末、古墳時代後期:6世紀、古墳時代終末期:7世紀として想定する。)

2. 古墳時代の戦いを何から考えるか

古墳からは大量の武器・武具が出土する 古墳には被葬者の権勢を思わせる大量の副葬品が納められる。その中でも武器・武具は質・量ともに大きな位置を占めている【図1】。だから、日本の歴史上、一番多くの武器や武具が出土しているのが古墳時代だ。たくさんの武器・武具が発掘されているということは、それを素材とした「戦い」の研究にはうってつけだ。

古墳出土の武器・武具は副葬品 ただし、古墳から出土した武器・武具はあくまで「副葬品」だということには注意が必要だ【図2】。もしかしたら、最初から「使うこと」を考えていない「形だけ」のものかもしれない。副葬するために作られたのかもしれない。事実、実用品としては理解できない形や大きさのものもある。それでも、この大量の資料を生かさないのはもったいない(それを除くと、議論できる資料がほとんどなくなってしまうということもあるが)。大量の副葬品たる「武器・武具」から、そして古墳時代の遺跡から、古墳時代の戦いを考えてみよう。

何から戦いを考えるのか 戦争と呼ばれる集団どうしの戦いは広義の政治・外交の一部分だ(そして、狭義の外交の失敗でもある)。そこには、集団の階層化や統制の度合い、それに伴う戦法・戦術・戦略、武器の確保、物資生産や人と物の補給、移動や輸送、情報の入手、周囲の集団との利害調整、戦後処理など多様な面があり、全部を論じてはじめて総体としての「戦争」だ。が、現実的

に考古学的な情報からすべてを論じるのはほぼ不可能だ。そこで今日は、誰が誰と、どのように戦ったのか。そして古墳時代の戦いは社会に何をもたらしたのか。そこにしぼって考えてみる。

3. 誰が誰と戦ったのか

武器を手にした地域 古墳が造られる領域は、古墳時代300～400年間の中でも変化する。ただし、刀剣や矢（残っているのは一般に鏃のみ）といった武器はどんな地域や階層の古墳であっても副葬されうる可能性がある【図3】。つまり、古墳が造られた地域には、ある程度そうした鉄製の武器は行き届いていたと考えても大過ない。

武器を副葬した人々 だからといって、全ての古墳に武器が副葬された訳ではない。一般的に階層が高い古墳（≒大型の古墳）ほど武器・武具が出土する割合は高いが、それは別に武器・武具に限らない。ただし、甲冑や長剣・長刀、鏃が出土した古墳の被葬者は基本的に男性だ。武器・武具を副葬したのは、基本的には大人の男性だ。これはそれが単に「男の持ち物」だったからかもしれないし、「（女性も使ったかもしれないが）副葬するのは男だけ」だったからかもしれない。でもこうした現象は、古墳に副葬された武器・武具が、首長としての権勢や職能を表象するだけのものではなく、被葬者本人や周辺の人たちの「生前の武装」をある程度反映していると考える上では追い風となるかもしれない。

戦う女性？ しかしそれにも例外がある。宮崎県や鹿児島県に造られた地下式横穴墓といわれる墓からは、女性の人骨に添えられて長剣・長刀や鏃が出土する【図4】。これは南九州では女性も戦士として活躍していたということなのか。それとも「女性にも矢を副葬して構わない」という社会的なルールの違いなのか。同じ墓の中で女性に一番多くの武器が副葬されていることもあるから、ルールの違いや狩りの道具と考えるよりは、「戦士」としての女性を考えたところだ。

武器が出土する古墳の階層は？ 古墳時代前期前半には前方後円墳や前方後方墳から武器が出土する【図5】。前期後半には中型の円墳が各地で造られるが、そこからも武器は出土する。中期前半、中期後半と小規模な円墳・方墳からも多量の武器が出土するようになる【図6】。後期にはそうした傾向はさらに進展する。これは当初は限られたエリート層のみが武器を所有できたのが、やがて中小規模の有力者も武器を保有できるようになったとも見える。しかし、他の副葬品も同じく出土するようになるので、単純に武器の保有階層の話とは言えなさそうだ。でも、後期まで、確実に武器の出土古墳の総数は増えていく。

朝鮮半島でも出土する 日本列島の古墳から出土するものと全く同じ武器・武具は同時期の朝鮮半島でも出土する【図7】。日本列島から渡った戦士だったのか。朝鮮半島の有力者に送られたものだったのか。それとも倭人と戦い奪った戦利品なのか【図8】？少なくとも後期前半までは日本列島では製鉄はできず、専ら朝鮮半島から輸入した鉄を加工して武器にしていた。どうやってそれだ

け大量の鉄を輸入できたのか。朝鮮半島に一定の権益や勢力圏を持っていたのか、強力な交易相手があったのか。前者ならば、それなりに軍事的な裏付けは必要だったはずだ。後者ならば、交易相手は見返りに何を求めたのだろうか。多くの鉄が武器・武具にされることは分かっていたはずなのに。

日本列島の甲冑と朝鮮半島の甲冑 日本で出土する鉄製の甲冑は最初は朝鮮半島のもをモデルに作られた可能性がある。しかし、すぐに日本列島独自のデザインを獲得し、継続して作られるようになった（しばらくは朝鮮半島から輸入したとする異論もある）【図9・図10】。その後も技術導入は何度か行われたようだが、一貫して朝鮮半島の人たちとは異なるデザインへの固執があった。「倭人」としてのアイデンティティーを示したのか。ユニフォームのような役割があったのか。

「実用」を感じさせる甲冑 武器や武具に「補修」の痕跡があれば、実用の可能性を感じさせる。日本出土の甲冑にも「補修」や「改造」の可能性のある痕跡が一部で知られるが、朝鮮半島出土の日本列島製甲冑には、日本の事例とは比べ物にならないほどそうした「補修」の可能性のあるものの割合が高い印象を受ける【図11】。玉田68号墳出土の短甲には欠けた部分を補修したかのような痕跡が、玉田28号墳出土の短甲にはまるでホコで突き刺されたかのような穴が開いている。補修痕跡や突き刺された穴(?)など、日本列島出土のもの以上に、「実用された」印象を受ける。

誰が誰と戦ったのか 畿内王権の勢力拡大は日本列島内各地域の勢力との衝突や、各地域間・地域内での軋轢を生み出しただろう。しかし、そうした軋轢が大規模で恒常的な戦いに発展した証拠ともいえる、軍事施設や防御施設の発達は今のところ知られない。一般集落にまで戦火はおよぼなかったのか。「野戦」で問題が解決するようなルールがあったのか。一方で、首長居館と呼ばれる館は周囲を溝で区画するなど一定の防御性もみられる【図12】。祭祀の場としての機能も認められるが、首長間での勢力争いもあったのだろうか。こうした居館は一般の民衆が暮らした集落とは様相が全く異なっている【図13】。

日本列島各地での戦いはあったのか ただし、日本列島内に戦いの可能性を感じさせる遺跡も皆無ではない。畿内から発した古墳文化と北方の続縄文文化の境界線に位置する、宮城県入の沢遺跡だ【図14】。丘陵の上に営まれた集落は深い堀と堀に囲まれる防御性の高いものだったが、多くの建物が焼失して集落が終焉していた。焼け落ちた堅穴建物の中には、銅鏡や鉄器など、普通は古墳に副葬されるものが持ち去られずに残されていた。入の沢遺跡に人々が居住した古墳時代の前期後半は、それまでに比べて畿内の王権の影響が東西南北へさらに拡大し、古墳文化が大いに広まった時代だ。そうした背景を考えれば、続縄文文化との軋轢の中で、防御的な集落が焼打ちされたといっても違和感のない状況かもしれない。ただし、集落を廃棄する際に、建物を焼くという祭祀が行われた痕跡の可能性もあり、決定打に欠ける。もし、本当に戦いがあったとすれば、それはいったいどこで行われたのだろうか。

4. どのように戦ったのか

武器と武具の変遷①：前期【図 15】 3世紀のうちは日本列島で作ることができた鉄製の武器はせいぜい短剣（手に持てば剣だが、長柄をつければやりになる。）や鍔ぐらいのものだった。鍔には鉄だけでなく青銅も使われていた。1m近い長刀も時折出土するが、中国からの輸入品であった可能性が高い。甲（よろい）や冑（かぶと）は木や革で作られていた。4世紀に入ると、鉄製の板を組み合わせる甲を作ることが可能になるが、数はとても限られていた。鉄製の籠手もいくつか見つかっているが、基本的に片手分しかなく、弓を持つ左手用だったようだ。鉄で身を固められる有力者の主な武器は弓矢だったのか。矢は鞞（ゆぎ）に入れて、背負って持ち運んでいた。

武器と武具の変遷②：中期前半【図 16】 武器・武具の生産の大きな画期が4世紀終わりから5世紀前半だ。鉄製の冑や甲の付属具が出揃い、鉄で全身を守りかためることが可能になる。ただし、はじめのころは冑・胴部の甲と、胴部・肩部・上腕部の上半身全身装備という二つのパターンがありそうだ。これは、使う人間の階層差かもしれないし、弓矢が主なのかそれとも別かという武器も含めた装備の違いを表すのかもしれない。はじめは長剣が、やがて長刀が量を増し、重厚なホコや漆で塗り固めた置き盾が増加する。倭人の武装が一つの確立をみた時代だ。

武器と武具の変遷③：中期後半【図 17】 本格的な馬の使用が始まる。轡（くつわ）や鐙（あぶみ）などの馬具は騎馬の利用を示すが馬用の甲や冑はほとんどない。重装騎兵の突撃戦術は採用されず、兵種としての組織的な導入ではなく指揮官が乗る権威の象徴だったのか。弓騎兵の可能性も高いが、長弓には取り回しに限界がある。矢も長く鋭いものが一般化し、束としての単位が明確になる。腰部に下げて矢を入れる胡籥（ころく）が導入され、弓矢の扱いも大きく変わったようだ。小さな鉄板を大量に繋ぎ合わせた防御性・可動性に優れた小札甲（こざねよろい）も導入されるが、すぐには広まらなかったようだ。武器の取り扱いとの兼ね合いや、生産コストの問題だろう。

武器と武具の変遷④：後期【図 18】 小札甲が主流となり、短甲が無くなるなど、甲が一新される。刺突に機能特化した新たなホコが出現し、金属製の鏑が出現する。端緒は中期後半にあるが実用的な鋭い矢の束の中に、平根（ひらね）と呼ばれる平らで大型の鍔を1、2本程度含める例が増えるなど、象徴的な弓矢の扱いが確立し始めた可能性もある。簡素な馬具の出土量は大いに増加するので、中下級の有力者・武人も騎馬を利用したのだろう。刀や馬具の一部は金や銀で華やかに装飾されるようになり（装飾馬具、装飾付大刀）、実用の武器だけでなく権威の象徴としての武器が明確に現れる。盾が見られなくなるが、どのように身を隠し、守ったのだろうか。

武器から武装と戦法、軍団は復元できるのか 古墳の副葬品から、個人の、さらには集団の武装を復元するのは難しい【図 19】。時には100振りを超える刀剣や、500本を超える矢、10領を超える甲冑が副葬され、どのように考えても一人が使った武器の量を逸脱しているからだ。埋葬された人物の膝下に控えた武人集団あるいは戦いのときに武器を貸し与えられる一般民衆の武装と考えるのも一案だ。だが、こうした古墳への「大量副葬」は何も武器に限った話ではない。銅鏡も

石製の祭祀道具も、農具や工具も主に中期前半ごろまでは大量に副葬される。だから、こうした武器の大量副葬も「軍団の反映」とみるよりは、「祭祀の痕跡」とまずは考えねばならない。

復元しうる武装 それでも、古墳の被葬者一人が装備したと考えるのに合理的な量の副葬品が納められた場合もある。刀剣1～2振り程度、ヤリやホコ1～2本、30～50本程度の矢（おそらく一束として扱われていたのだろう）、甲冑1領、時には馬具1セット、ぐらいの出土事例だ【**図 20**】。これは「被葬者の生前の武装」と考えても違和感のない内容だ。そしてこうした副葬品のセットは中期後半から顕在化してくる傾向がある。副葬品も大きく変わる時代だが、どうやらこのあたりに武装や軍団構成の一つの画期がありそうだ。

武器はどうやって入手したのか①：前提 古墳時代は本格的な鉄の時代だ。副葬品には銅鏡や石製の祭祀具も多くあるが、農具といった生産具や武器は基本的に鉄製で、生活に関わる道具は基本的に鉄器化が達成されていた。ただし、前期までは銅鍍も一定数副葬され続けるから、鍍だけには青銅も利用されていた。中期の中頃には銅板を金メッキする鍍金の技術が導入され、さまざまな甲冑や馬具を中心に利用されるが、あくまでそれは装飾用で、機能の根幹は鉄が担っていた。ちなみに、日本列島での製鉄は後期後半に始まるとみられ、それまでは膨大な量の鉄器を中国や朝鮮からの輸入に頼っていた。刀剣やヤリ・ホコ、矢は刃部以外の部分には木や竹、糸や布、そして漆が使われたが、それは日本列島至る所で適したものが入手されたのだろう。

武器はどうやって入手したのか②：前期～中期前半【図 21・22**】** 前期前半には九州北部が高い生産技術を保持し、高度な製品はそこから東へと流通した可能性が高い。瀬戸内海沿岸や日本海沿岸でもやや技術に劣るが一定量の生産は行われたかもしれない。長刀など技術的に生産できないものは中国から輸入した。前期後半には畿内を中心に武器の出土量が増加し、九州北部から瀬戸内海沿岸での出土量が減少する。畿内での武器生産と、各地への流通体制が確立したのだろうか。こうした傾向は中期前半にも一層進展し、全国的に画一性の高い多くの武器が畿内を中心に生産され、日本列島各地へと流通していった。ただし、九州南部では鉄鍍や簡単な刀剣ぐらいは生産しており、独自の流通圏を築いていた。もしかしたら関東でも一部独自の生産をしていたかもしれない。

武器はどうやって入手したのか③：中期後半～後期【図 23・24**】** 中期後半にはそれまで畿内の限られた生産地で作られていた武器生産の多元化が始まる。矢の作り方や甲冑の多系統化がそれで、おそらく生産地は畿内だが、いくつもの工房でのある程度独立した生産と各地への流通が始まった可能性がある。後期にはそうした傾向はより顕著になり、後期後半には鉄鍍（＝弓矢）の地域生産・地域内流通体制が確立する【**図 25**】。通常の刀剣や簡素な馬具などにもそうした可能性はあるかもしれない。武器の生産と流通の面でも、中期後半はその後の流れを決める大きな画期の一つだ。

武器はどうやって入手したのか④：各地の動き 各地で「劣った」技術による生産で、武器の数を賄うという現象は中期以降の九州南部を例外として、他ではこれまで明確に確認されていない。畿内を中心とした武器生産技術と流通の統制が強固に働いていたのだろうか。それとも、自前で賄おうとするほど武器が求められていなかったのだろうか。後者だとすれば、各地との軋轢の度合いを考える上でも参照できるかもしれない。

どんな風に戦ったのか 出土人骨には即死となる刀傷や矢の痕がみられる例もあり、刀剣や弓矢が人にも向けられたことは間違いなさそうだ。「武人」と言われる埴輪はあるが、確実に戦いの場を模したものは無い。700例ほど存在する装飾古墳（絵画やレリーフが描かれた古墳）には、騎乗し弓矢を構える人物や馬上で盾を構えた人物が描かれたものがある【**図 26**】。狩りのシーンの可能性も高いが、少なくとも騎射は確立していたのだろう。副葬品から考えれば、中期前半までならば、甲・冑を身にまとい、左手に籠手を着けた高位首長は弓主体の戦法を復元できるかもしれない。でも、弓矢・ヤリ／ホコ・刀剣すべてが副葬品に含まれる場合も多い。高位首長は何でもやるのか。

5. 古墳時代の戦いは何をもたらしたのか

長距離交易と権益の確保 前期前半には中国との直接的な交易が行われたが、前期後半以降は朝鮮半島との間の（相手方の勢力は時期によって違うし、同時に複数の相手とやり取りをした可能性も高い）交渉ルートが確立した。一定の権益確保があったのだろう。一方で、日本列島内で「中心」と「周辺」が明確化し、東北の皮革や南島の貝など、古墳文化圏外との長距離交易もなされている【**図 27**】。これら長距離交易の背景には軍事力による裏付けや権益の保障があったことだろう。

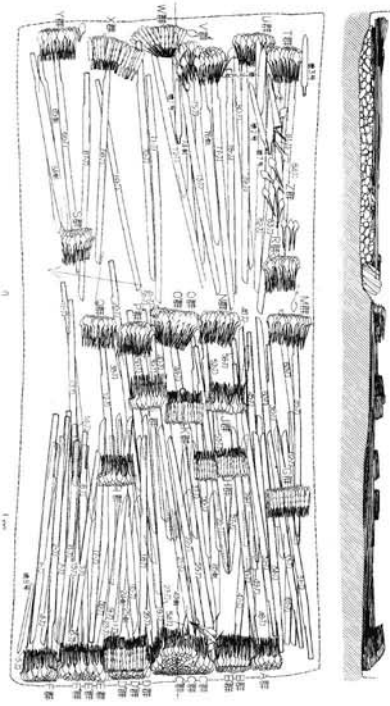
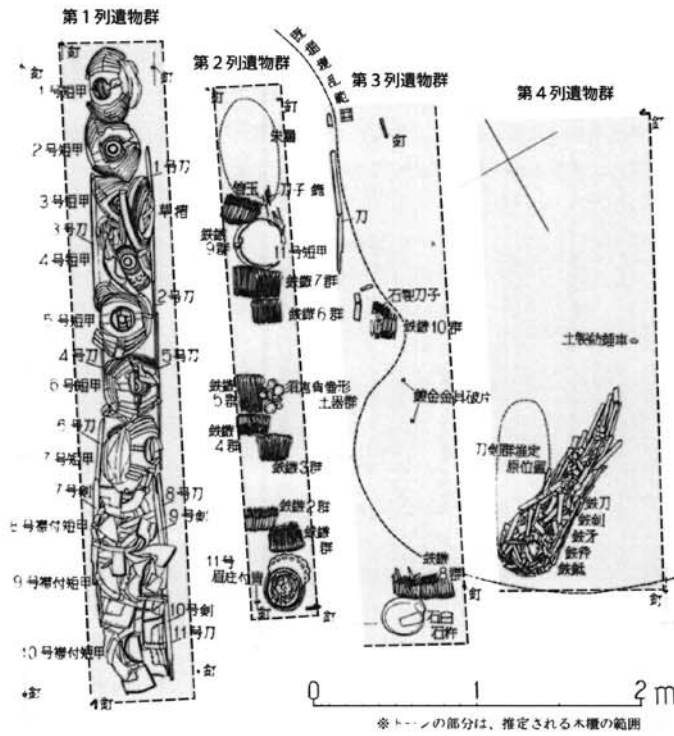
鉄と技術を求める 朝鮮半島との交易の一つの目的は日本列島で生産できない必需物資「鉄」だ。他にも窯業生産、馬匹生産、金工技術、農業・土木技術といった新技術が逐次導入された。弥生時代には日本海側の諸地域も直接的な交易を行った可能性が高いが、やがて九州北部の窓口としての割合が高まり、合わせて畿内王権による長距離交易「統制」も増大した可能性が高い。そうした長距離交易の掌握と国内流通の調整、技術的格差の増大が畿内王権の伸長に寄与したのだろう。

社会の変化 古墳時代には家族のあり方も大きく変わった【**図 28**】。中期中葉までは一定数の女性首長が存在し、同一古墳に男女のペアが埋葬された場合、その関係はキョウダイが原則だ。男女のキョウダイは比較的対等な関係にあったようだ。しかし、中期後半以降、男性中心原理が強まっていく。この背景の一つに男性が主役となる「戦い」により、社会における男性優位が進展した可能性がある。やがて家父長的な家族制度や男系継承原理が成立し、男性優位が構造化され強化される。倭王武による「祖彌躬みづから甲冑つらぬを環たまき」という語は、戦う男性像を自身の権力の正当性の根源としている【**図 29**】。埼玉県埼玉稲荷山古墳出土の鉄剣の銘文は直系的な継承による正当性を主張する【**図 30**】。限られた文字資料だが、それらが古墳時代中期後半に現れるのは意義深い。

古墳時代は戦いの時代か 大量の武器副葬、様式的・型式的な武器の変化の速さ、「軍事力」を前提として理解しうる社会の変化は、古墳時代に戦いが大きな役割を果たしたことを示唆している。日本という国家が成立していく中でも軍事力は大きな役割を果たしただろう（むしろ、軍事力が国家の指標とされることもある）。でも、直接的な戦いの痕跡は今のところ限定的だ。「軍事力」そのものよりも「武威」が大きな意味を持つ、直接的な暴力行為が限定される社会であった可能性もある。大型の古墳であっても「殉葬」が確認されていないのは、そのためかもしれない。「戦争は広義の政治・外交の一形態だが、狭義の外交の失敗」と思えば、「刀折れ、矢尽き・・・」とならずに、古墳の副葬品として武器を埋納＝廃棄できた社会は、「狭義の外交の失敗」の少ない社会だったのか。

<参考・引用文献（報告書は割愛）>

- 尾上元規 1993 「古墳時代鉄鏃の地域性—長頸式鉄鏃出現以降の西日本を中心として—」『考古学研究』第40巻第1号 考古学研究会
- 川畑 純 2015 『武具が語る古代史—古墳時代社会の構造転換—』プリミエコレクション60 京都大学学術出版会
- 鈴木一有 2014 「朝鮮半島出土の倭系武装にみる日韓交流」『武器・武具と農工具・漁具—韓日三国・古墳時代資料—』日韓交渉の考古学—古墳時代研究会
- 清家 章 2010 『古墳時代の埋葬原理と親族構造』 大阪大学出版会
- 高橋照彦・中久保辰夫（編） 2014 『野中古墳と「倭の五王」の時代』大阪大学総合学術博物館叢書10 大阪大学出版会
- 田中晋作 1995 「古墳時代中期における軍事組織について」『考古学研究』第41巻第4号 考古学研究会
- 田中晋作 2001 『百舌鳥・古市古墳群の研究』 学生社
- 田中良之 1995 『古墳時代親族構造の研究』ポテンティア叢書39 柏書房
- 豊島直博 2010 『鉄製武器の流通と初期国家形成』 塙書房
- 藤田和尊 2006 『古墳時代の王権と軍事』 学生社
- 松木武彦 2007 『日本列島の戦争と初期国家形成』 東京大学出版会
- 八木光則 2015 「古墳時代併行期の北日本」『東北の古代史2 倭国の形成と東北』 吉川弘文館



【野中古墳 (1~5列合計)】

- 甲冑 : 11領
- 鉄刀 : 153点
- 鉄剣 : 16点
- 鉄ホコ : 3点
- 鉄鏃 : 740点

【アリ山古墳北施設】

- 鉄刀 : 77点
- 鉄剣 : 8点
- 鉄ホコ : 1点
- 鉄鏃 : 1542点

【アリ山古墳中央施設】

- 鉄ヤリ : 40点
- 鉄ホコ : 3点
- 鉄鏃 : 70点

図1 武器の大量埋納事例 (左:大阪府野中古墳、右:大阪府アリ山古墳北施設)

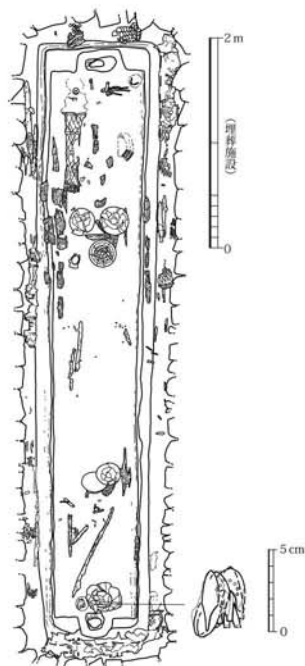


図2 滋賀県雪野山古墳の鉄鏃出土状況

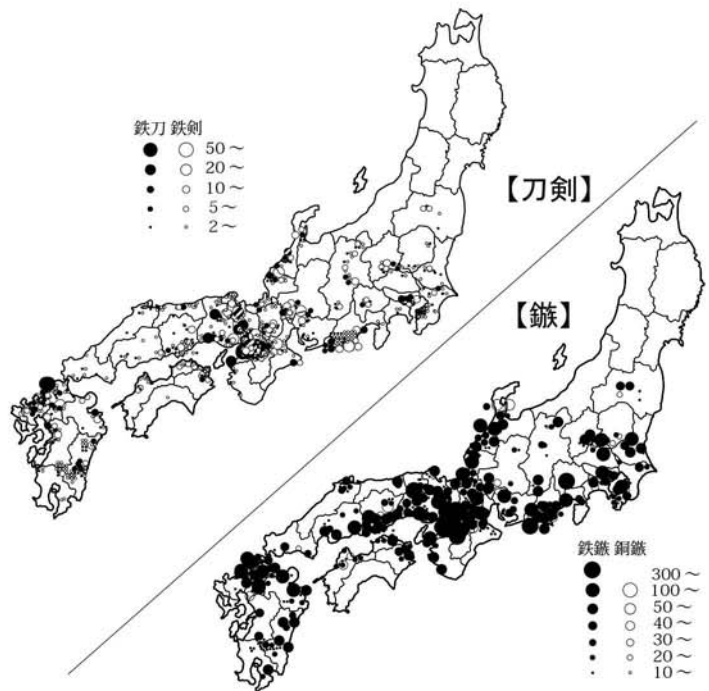


図3 刀剣・鏃の出土古墳の分布 (5世紀まで)

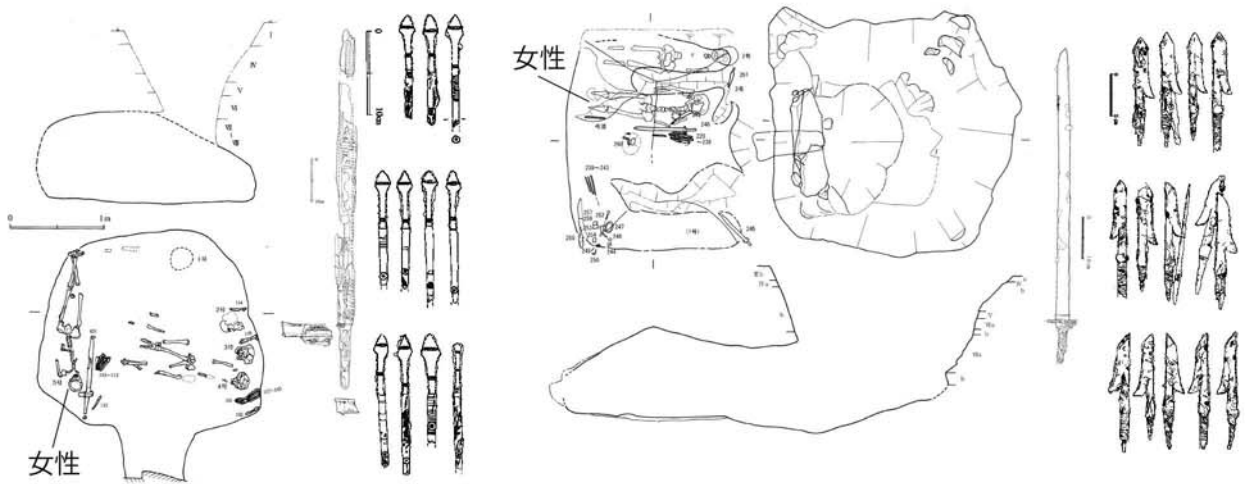


図4 宮崎県島内20号(左)・152号(右)地下式横穴墓の出土状況と出土武器

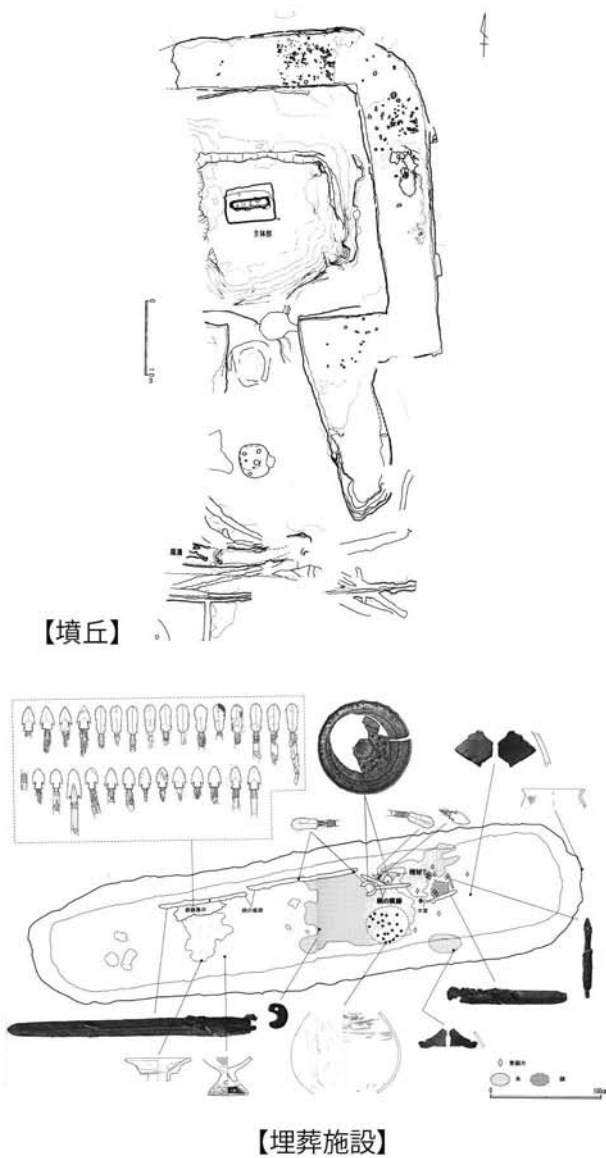


図5 静岡県高尾山古墳と遺物出土状況

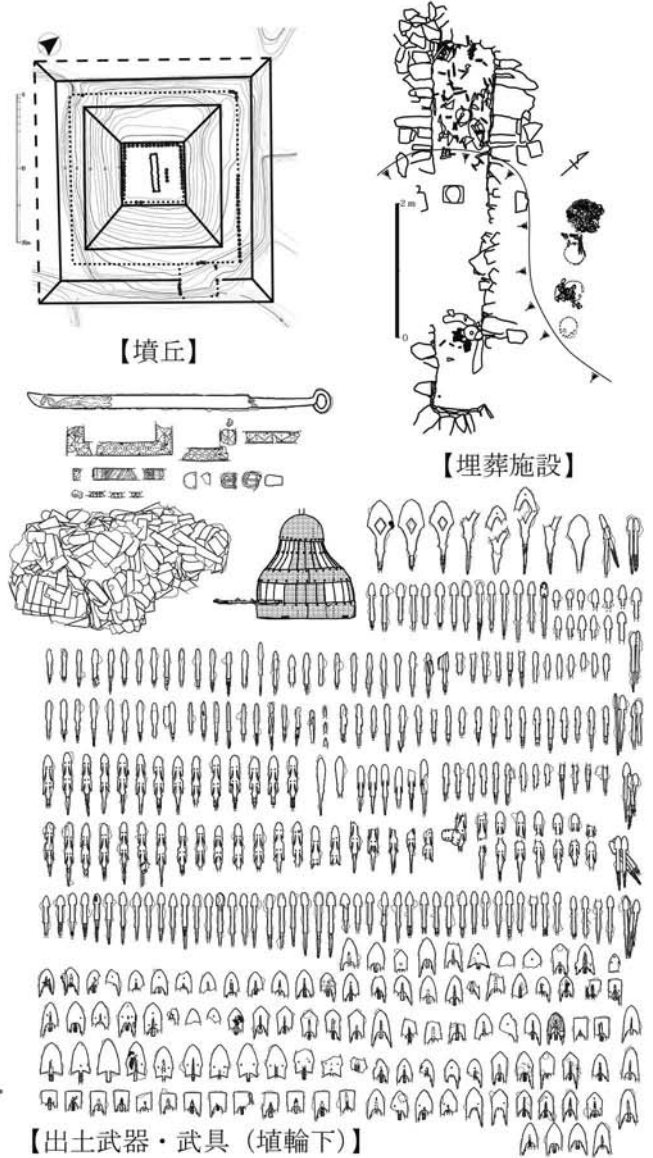


図6 奈良県五條猫塚古墳と出土武器・武具

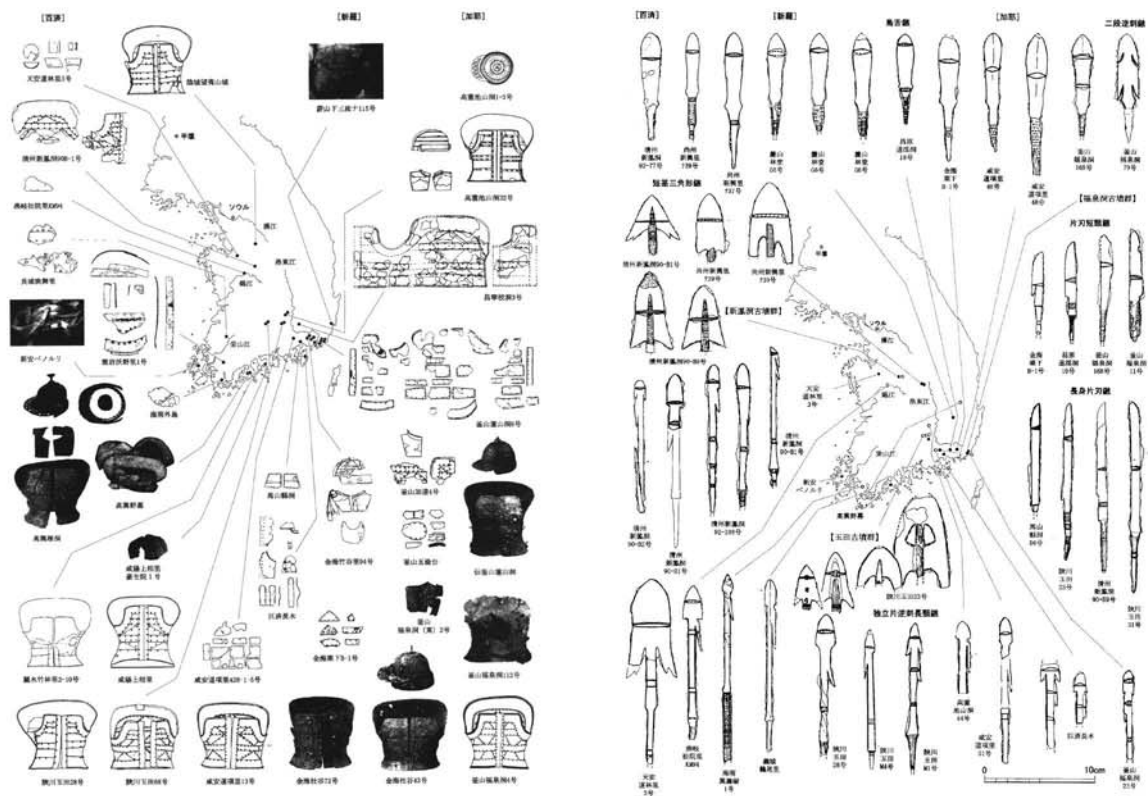


図7 朝鮮半島出土の倭系甲冑（左）・鉄鏃（右）（鈴木 2014）

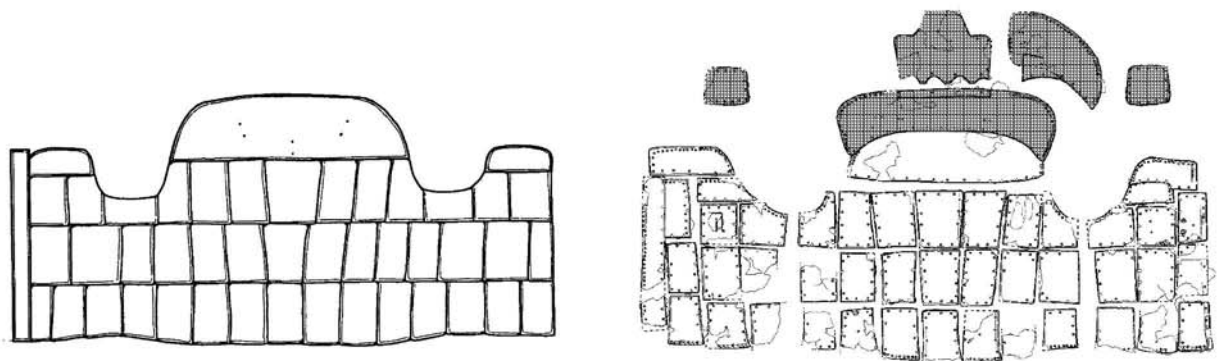


図8 島根県中山B 2号墳出土短甲（左）と韓国福泉洞 64号墳出土板甲（右）

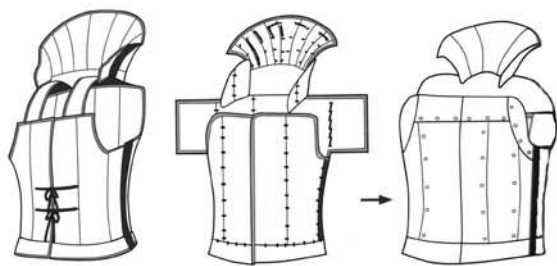


図9 朝鮮半島出土の縦長板甲模式図

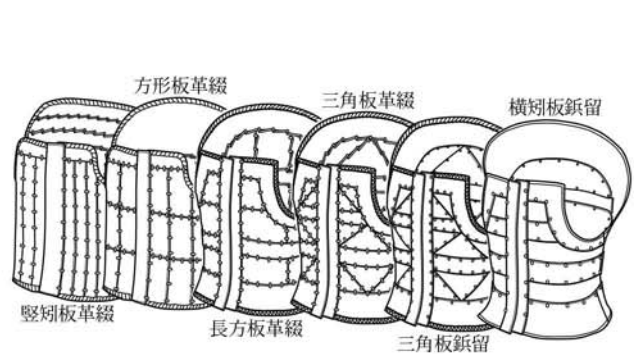


図10 日本列島の短甲の形式分類



図11 韓国玉田68号墳出土短甲（左）と玉田28号出土短甲（右）

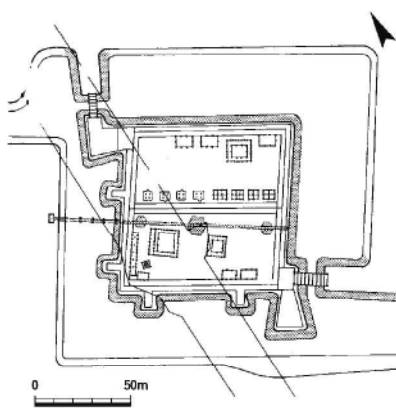


図12 群馬県三ツ寺Ⅰ遺跡想定復元図

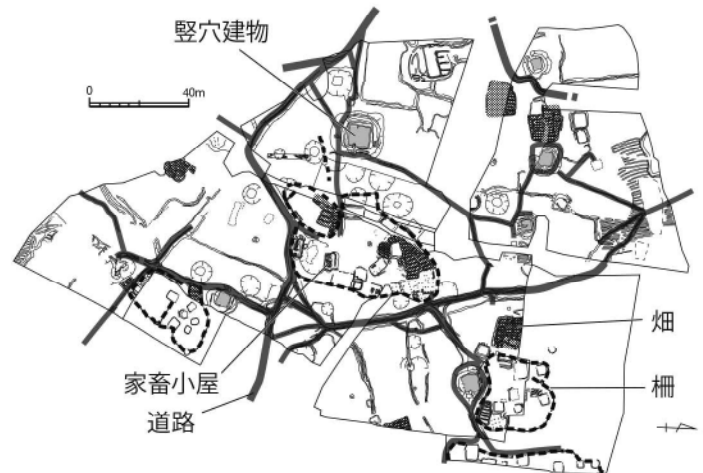


図13 群馬県黒井峯遺跡模式図

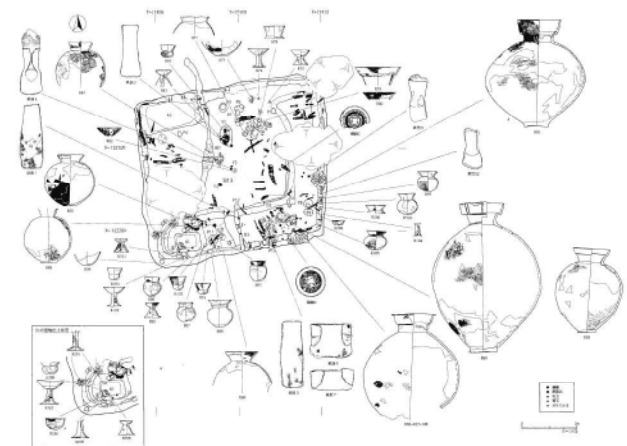


図14 宮城県入の沢遺跡の平面図と竪穴建物遺物出土状況

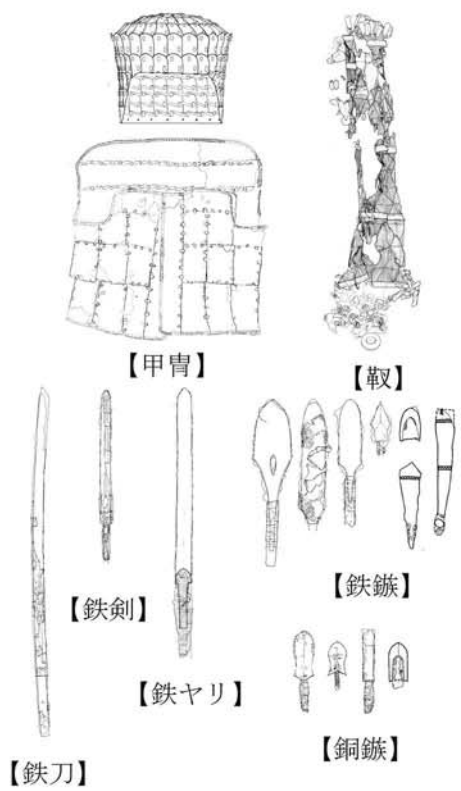


図 15 前期の武器・武具

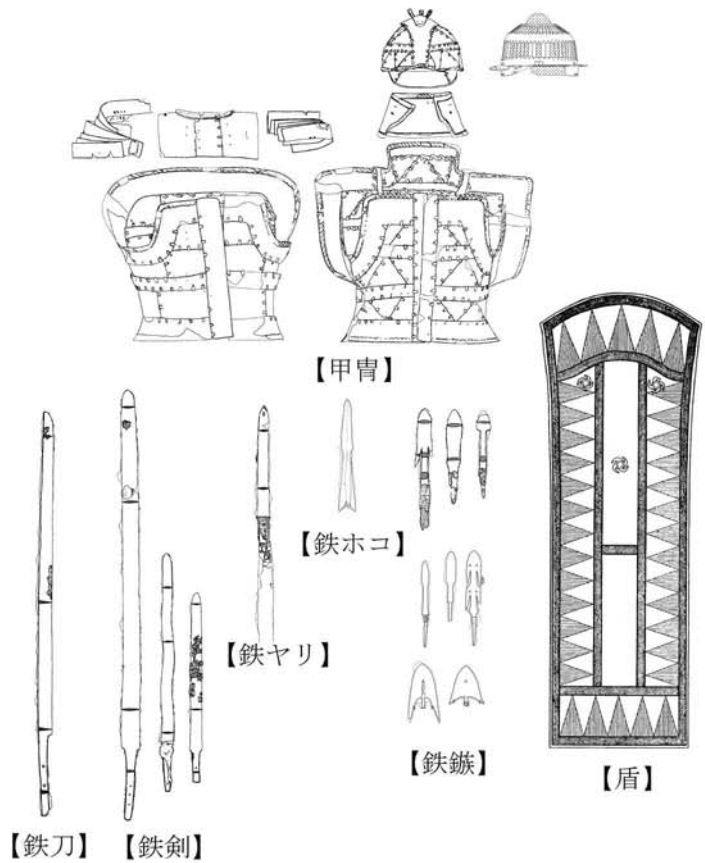


図 16 中期前半の武器・武具

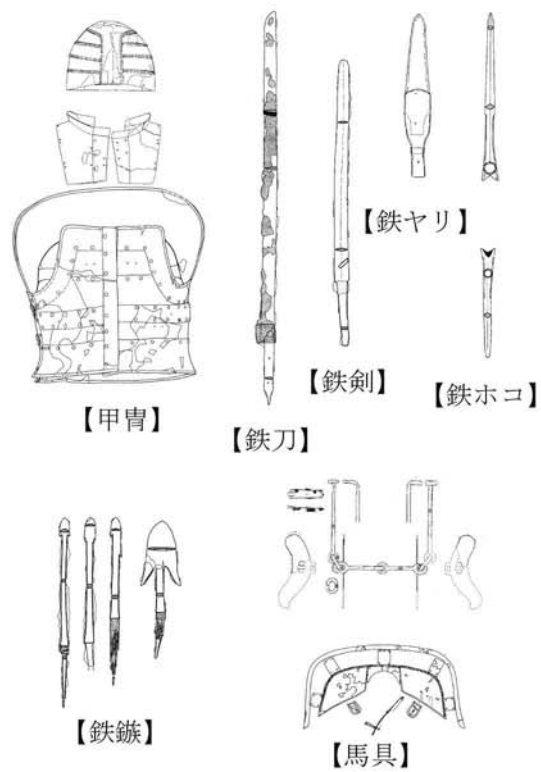


図 17 中期後半の武器・武具・馬具

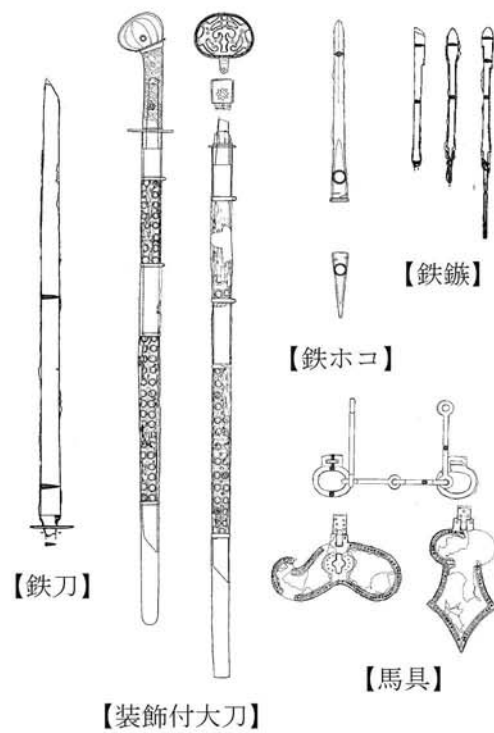
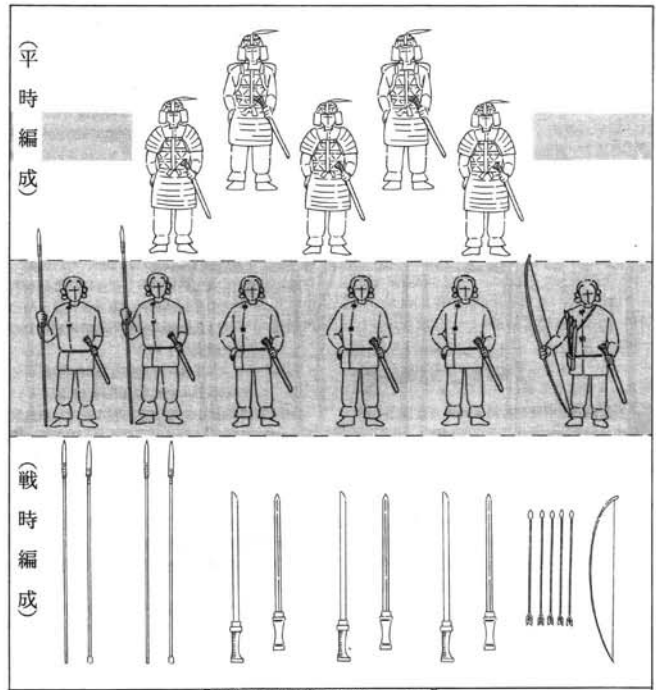


図 18 後期の武器・武具・馬具



【大塚古墳パターン】



【野中古墳パターン】

図 19 古墳時代中期の武装の復元 (田中 1995)

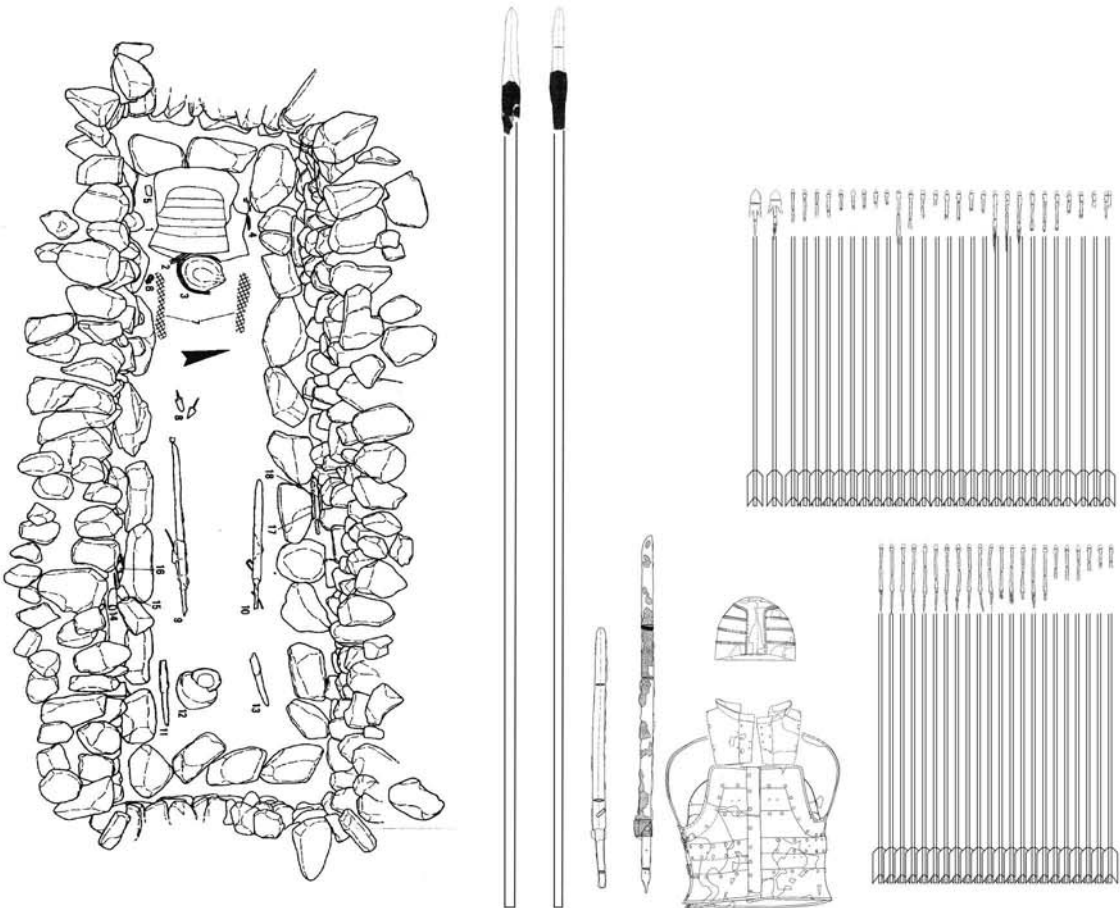


図 20 香川県川上古墳の遺物出土状況と出土武器の復元

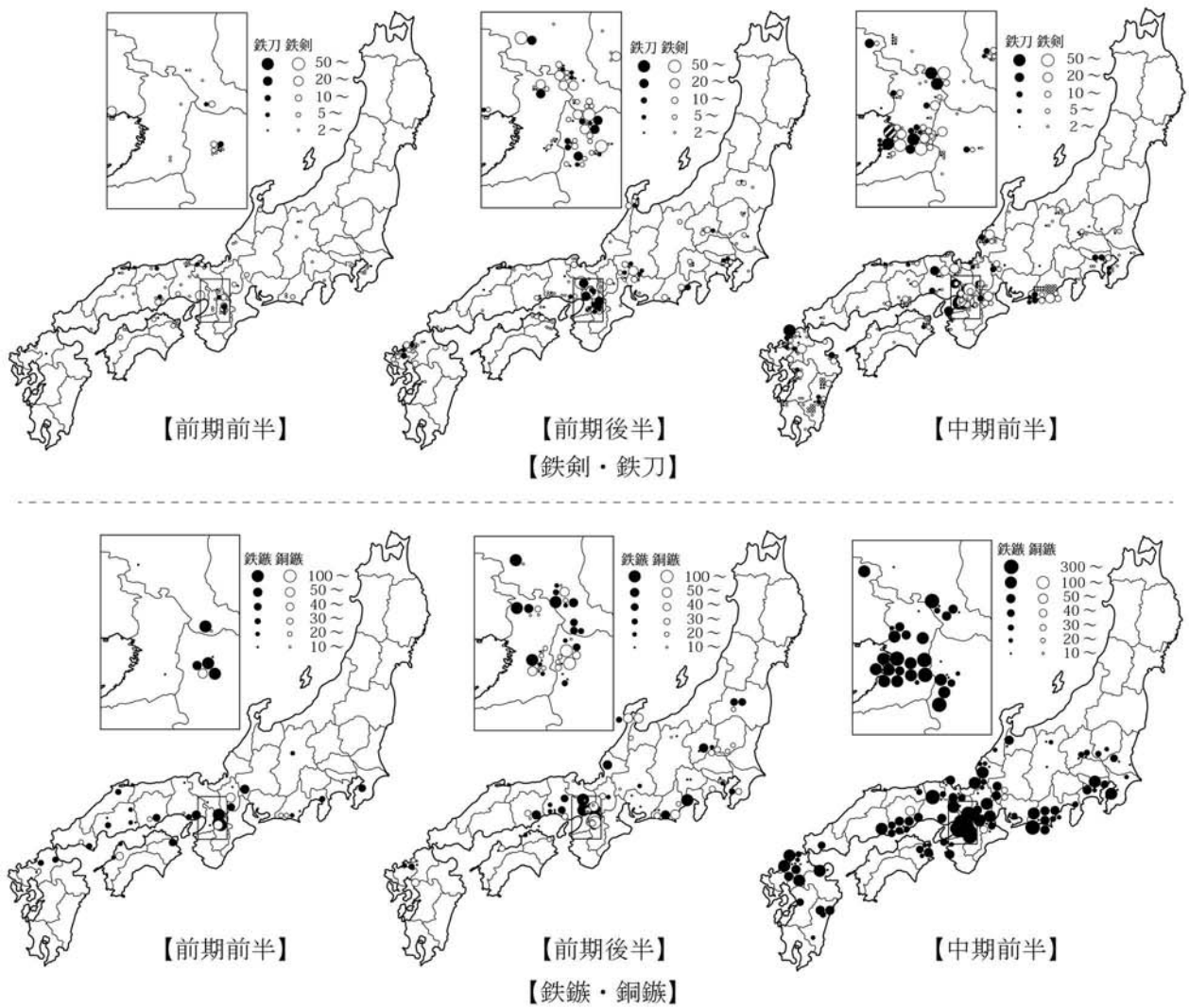


図 21 武器出土古墳の変遷

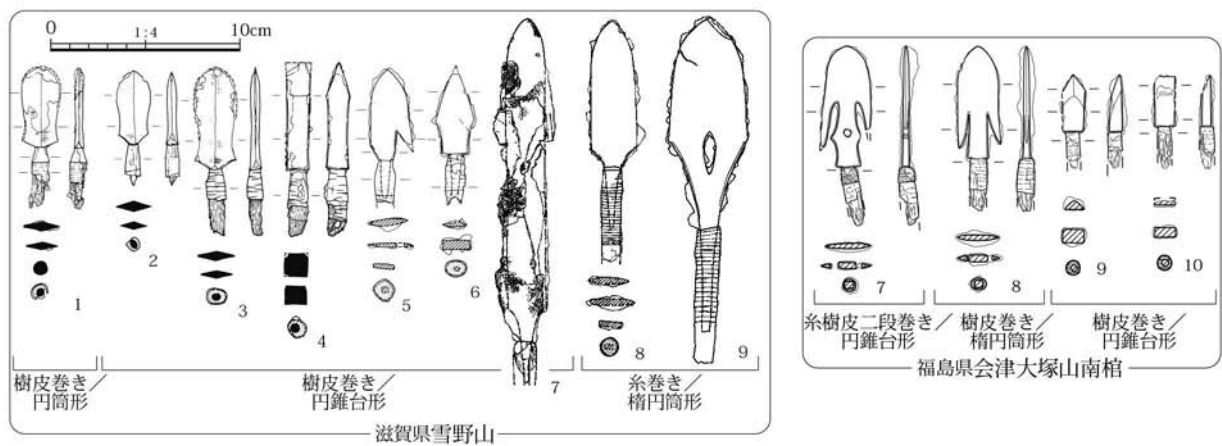


図 22 前期古墳出土鉄鏃と矢柄の製作手法

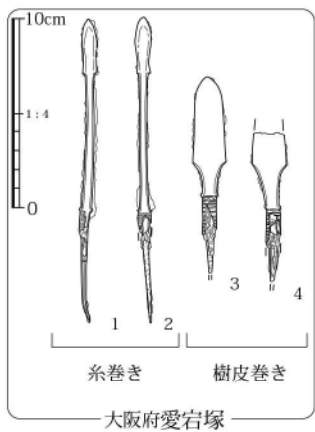
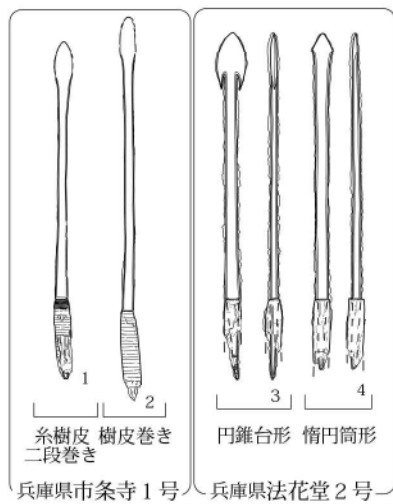


図23 中期後半・後期古墳出土鉄鏃と矢柄の製作手法

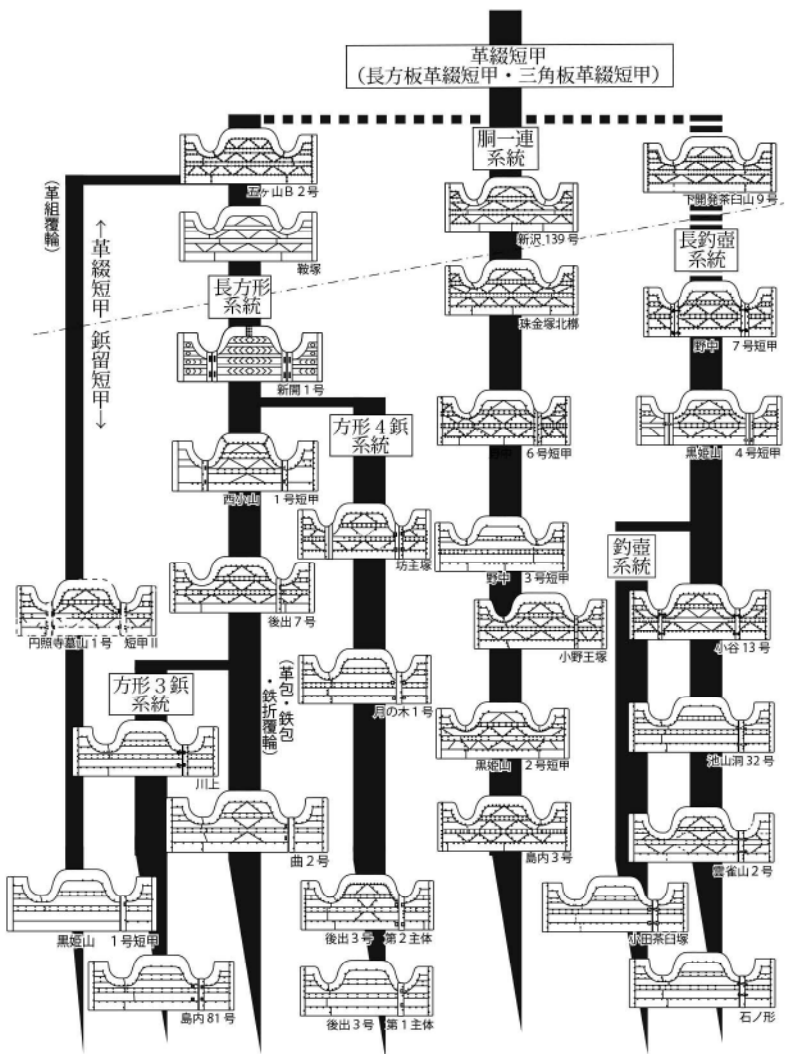


図24 中期半ば～後半における短甲の系統分化

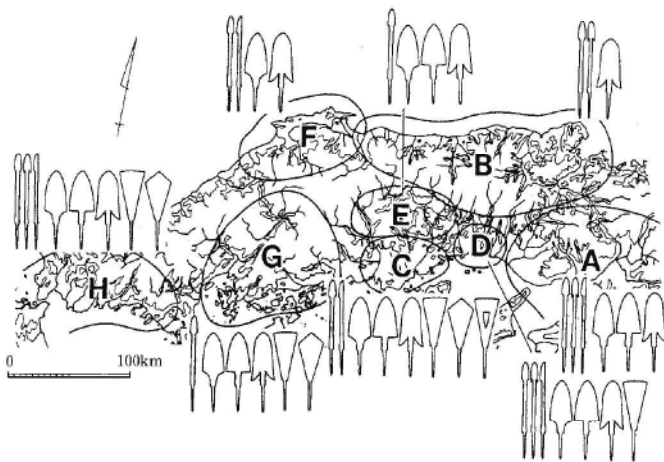


図25 後期における鉄鏃の地域性 (尾上 1993)

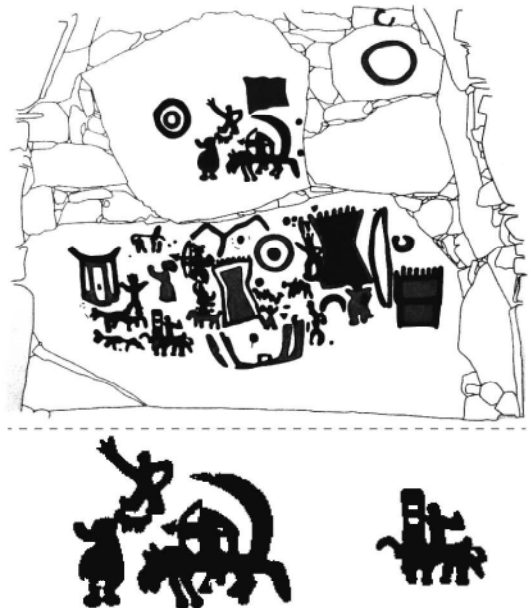


図26 福岡県五郎山古墳の壁画

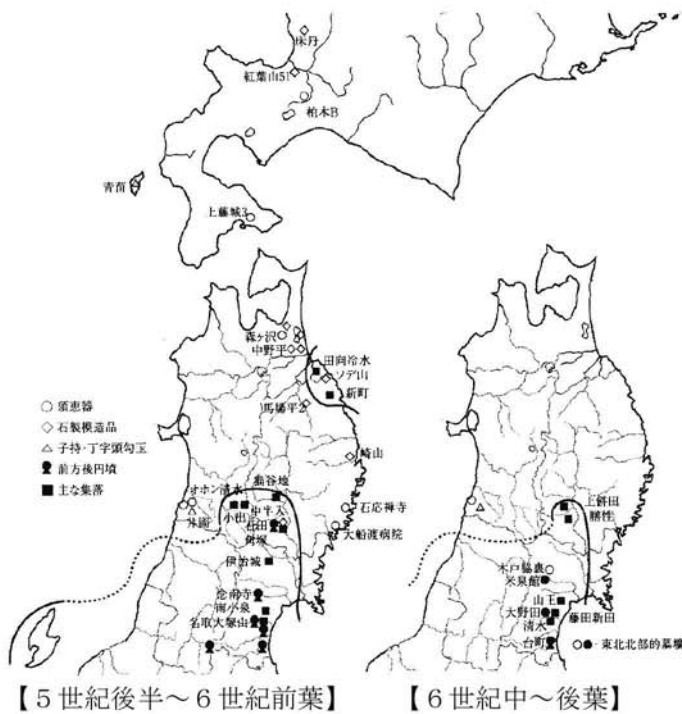


図 27 東北北部～北海道における古墳文化的要素の波及（左）と出土黒曜石製搔器・削器（右）（八木 2015）

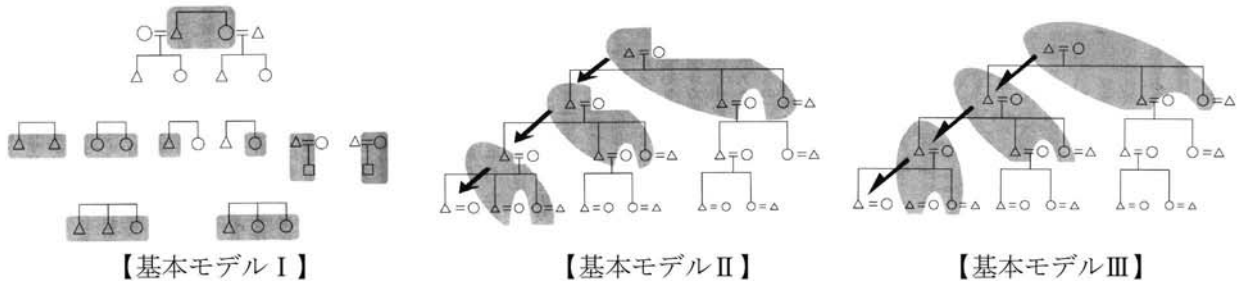


図 28 古墳時代における被葬者関係の変遷（田中 1995）

（前略）興死。弟武立、自称使持節・都督倭・百濟・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓七国諸軍事・安東大將軍・倭国王。順帝昇明二年、遣使上表曰、封国偏遠、作藩于外。自昔祖禰、躬擐甲冑、跋涉山川、不遑寧处。東征毛人、五十五国、西服衆夷、六十六国、渡平海北、九十五国。王道融泰、廓土遐畿。累葉朝宗、不愆于歲。臣雖下愚、忝胤先諸、驅率所統、歸崇天極。道遙百濟、裝治船舫。而句驪無道、凶欲見吞、掠抄辺隸、虔劉不已。每致稽滯、以失良風。雖曰進路、或通或不。臣亡考濟、実忿寇讐壅塞天路、控弦百万、義声感激、方欲大举、奄喪父兄、使垂成之功不獲一簣。居在諒闇、不動兵甲、是以偃息未捷。至今欲練甲治兵、申父兄之志。義士虎賁、文武効功、白刃交前、亦所不顧。（後略）

図 29 『宋書』倭国伝（部分）



図 30 埼玉県埼玉稲荷山古墳出土鉄剣

（表）
辛亥年七月中記乎獲居臣上祖名
意富比埵其兒多加利足尼其兒名
弓已加利獲居其兒名多加披次獲
居其兒名多沙鬼獲居其兒名半弓
比

（裏）
其兒名加差披余其兒名乎獲居臣
世々為杖刀人首奉事来至今獲加
多支齒大王寺在斯鬼宮時吾左治
天下令作此百練利刀記吾奉事根
原也

考古学からみた古代東北地方の争乱

岩井 浩人 (青山学院大学 准教授)

1. はじめに

- ・日本の古代国家は、列島東北部に暮らす人々を「蝦夷(エミシ)」と呼んだ。
- ・7世紀中頃から蝦夷の領域へと支配を拡大。9世紀初頭には、現在の秋田市から盛岡市を結ぶラインあたりまで版図が北上。
- ・郡や城柵の設置、移民(柵戸)移配、征夷など様々な政策を展開。
→ 支配の拡大・強化に対する蝦夷の反乱が度々生じる。
- ・8世紀末頃、桃生城襲撃事件や伊治公皆麻呂の乱などを通して、国家と蝦夷の衝突が激化、拡大。
→ いわゆる三十八年戦争へ。
- ・古代から中世への過渡期である11世紀には、奥六郡に安倍氏、出羽仙北三郡に清原氏が台頭。
→ 前九年・後三年合戦。そして、平泉藤原氏へ。
- ・古代における東北地方の「たたかい」について、考古学の成果を交えて解説。

2. 蝦夷政策の展開と軋轢

○城柵の設置

- ・越国に淳足柵(647年)と磐舟柵(648年)を設置。陸奥側は史料に無いが、仙台市郡山遺跡I期官衙が同時期の城柵。その後、段階的に北上し(図2)、812(弘仁3)年の徳丹城造営で終了。
※大化前代の国造設置地域(図1)の外側が蝦夷の領域として認識(今泉2006)。
- ・文献史料に見えるのは20数箇所。史料にない城柵も。
- ・多賀城(724年創建)には国府と鎮守府が置かれ、城外に方格地割の街並が段階的に整備(図3)。
- ・陸奥国、出羽国、越後国の国司の職掌 → 饗給・征討・斥候
- ・政庁と外郭で構成される二重構造 → 一般の地方官衙(郡家・国府)とは異なる構造。
※8世紀後半には、三重構造をもつ城柵が現れる(図5)。
- ・城柵の設置に際し、柵戸を移住。郡を設置して支配を拡大。
- ・陸奥国の柵戸は坂東諸国が多く、出羽国は東海・東山道諸国に北陸道諸国が加わる(鈴木2008)。
→ 在地系住民と移民系住民との間で軋轢、支配の拡大・強化に対する反発。

○蝦夷の反乱と征夷

- ・709(和銅2)年、越後国での征夷。
- ・720(養老4)年、蝦夷が反乱し按察使上毛野広人を殺害。最初の大規模な反乱。
→ 権現山・三輪田遺跡、南小林遺跡の火災(高橋誠明2003)。
- ・724(神亀元)年に海道蝦夷が反乱。同年、多賀城創建。→ 以後50年反乱記事なし。

3. 三十八年戦争の時代

- ・ 774 (宝亀 5) 年、陸奥国で海道蝦夷が反乱、桃生城を襲撃。
- ・ 776 (宝亀 7) 年、山道蝦夷と海道蝦夷を征討。
- ・ 778 (宝亀 9) 年、伊治公咎麻呂などの叙位。→ 780 (宝亀 11) 年、伊治公咎麻呂が反乱。按察使紀広純の殺害。多賀城を襲撃。→ 各地の蝦夷の同調。戦争の激化。
- ・ 桓武朝の 789 (延暦 8)、794 (延暦 13)、801 (延暦 20) 年に征討。
 - 一次は胆沢の蝦夷との戦いで敗北。二次は、大規模な軍事行動を実施し、平安遷都とともに戦勝報告。三次で胆沢、志波を制圧。
- ・ 802 (延暦 21) 年、坂上田村麻呂による胆沢城造営。阿弼流為の降伏。
- ・ 803 (延暦 22) 年、志波城の造営。
- ・ 805 (延暦 24) 年、徳政相論を経て軍事 (征夷) と造作 (造都) を停止。国家財政と民衆の疲弊。
- ・ 811 (弘仁 2) 年、文室綿麻呂の征夷。→ 征夷終結。

4. 奥羽の騒乱

- ・ 志波城を徳丹城 (812 年設置) へ移転 (図 7)。規模縮小、南へ後退。
- ・ 軍事的緊張は緩和するが、蝦夷支配の不安定で流動的な状態は 9 世紀を通して続く (鈴木 2016)。
- ・ 承和年間を中心とする陸奥国での騒乱。
- ・ 878 (元慶 2) 年、秋田城下での「元慶の乱」勃発。
- ・ 茨城県古河市の川戸台遺跡をめぐる議論 (古河市歴史シンポジウム実行委員会 2017)。
- ・ 939 (天慶 2) 年、天慶の乱。俘囚の反乱。

5. 古代末期の北奥と環壕集落

- ・ 東北北部 (青森県・秋田県北部・岩手県北部) 以北は、いわゆる蝦夷の地 (日本国の外) としてあり続ける。
- ・ 10 世紀後半～11 世紀、東北北部を中心に居住域を壕で圍繞する集落が出現 (図 8, 9)。
 - 性格、機能をめぐり議論 (防御的機能を一義とし、軍事的緊張状態を想定する意見など)

6. 前九年・後三年合戦と安倍・清原氏

○前九年合戦: 1051 (永承 6) 年～1062 (康平 5) 年

- ・ 安倍氏の勢力圏 → 奥六郡 (胆沢・和賀・江刺・稗貫・志波・岩手)。図 10
- ・ 陸奥守藤原登任と安倍頼良の衝突。源頼義が陸奥守、ついで鎮守府将軍に任官 (兼官)。
 - 源氏と安倍氏の衝突。黄海合戦では、源氏が大敗。
- ・ 清原氏の参戦。源氏・清原氏の連合軍と安倍氏の戦いへ。
- ・ 1062 (康平 5) 年、厨川の戦いで終結。
- ・ 安倍氏十二柵。確定しているのは金ヶ崎町鳥海柵 (図 12)。
- ・ 鳥海柵: 胆沢城跡の北西約 2 km に位置。河岸段丘の平坦面を利用。開析谷で 4 つの台地に分かれる。10 世紀前葉～中葉の集落跡、空白期を挟んで 11 世紀に土地利用再開。11 世紀前半～中頃の遺物と遺構 (四面庇建物など)。

○後三年合戦: 1083 (永保 3) 年～1087 (寛治元) 年

- ・ 前九年合戦を経て、清原氏が出羽仙北三郡 (雄勝・平鹿・山本) と奥六郡を統治。

- ・清原氏一族の内乱と源義家の介入 → 泥沼状態へ。
- ・金沢柵での最終決戦 → 清原氏嫡流として清衡のみが生存。義家は国司解任。
- ・清衡は姓を藤原氏へ戻し、平泉藤原氏の礎を築く。
- ・大鳥井山遺跡：10世紀後半から11世紀末まで存続。大鳥井山と小吉山の二つの独立丘陵を利用（図14）。巨大な二重の堀と土塁で囲繞（写真1）。大鳥井山山頂には四面庇建物。
- ・金沢城跡と陣館遺跡（金沢柵推定地）：羽州街道を挟んで対面（図13）。陣館遺跡から四面庇建物と道路跡、鉄鍋。平成29年度調査に、金沢城跡の景正功名塚周辺の斜面から柱材等を検出。
→ 後三年合戦絵詞に描かれる建造物との検討。

7. まとめ

主要参考文献

- 今泉隆雄 2006 「東北四国造制から国評制へ」『古代史の舞台』岩波書店
- 岩井浩人 2017 「東北北部における古代末期環壕集落の構造と規模」『青山考古学』第33号 青山考古学会
- 岩井浩人 2018 「古代末期環壕集落の成立過程」『古代文化』第70巻第1号 古代学協会
- 熊谷公男 2015 「蝦夷支配体制の強化と戦乱の時代への序曲」『蝦夷と城柵の時代』吉川弘文館
- 熊谷公男 2016 「元慶の乱と北方蝦夷集団」『三十八年戦争と蝦夷政策の転換』吉川弘文館
- 古河市歴史シンポジウム実行委員会 2017 『古河市歴史シンポジウム 古河川戸台遺跡をめぐる諸問題～対蝦夷戦争・天台教団・平将門の乱』（資料集）
- 島田祐悦 2016 「出羽山北三郡と清原氏」『前九年・後三年合戦と兵の時代』吉川弘文館
- 鈴木拓也 2008 『蝦夷と東北戦争』吉川弘文館
- 鈴木拓也 2016 「光仁・桓武朝の征夷」「征夷の終焉と蝦夷政策の転換」『三十八年戦争と蝦夷政策の転換』吉川弘文館
- 関幸彦 2006 『東北の騒乱と奥州合戦-「日本国」の成立-』吉川弘文館
- 高橋誠明 2003 「多賀城創建にいたる黒川以北十郡の様相-山道地方-」『第29回古代城柵官衙遺跡検討会資料集』古代城柵官衙遺跡検討会第29回大会実行委員会事務局
- 樋口知志 2016 「前九年合戦」「後三年合戦から平泉開府へ」『前九年・後三年合戦と兵の時代』吉川弘文館
- 八重樫忠郎 2015 『北のつわものの都 平泉』新泉社
- 八木光則 2016 「奥六郡と安倍氏」『前九年・後三年合戦と兵の時代』吉川弘文館

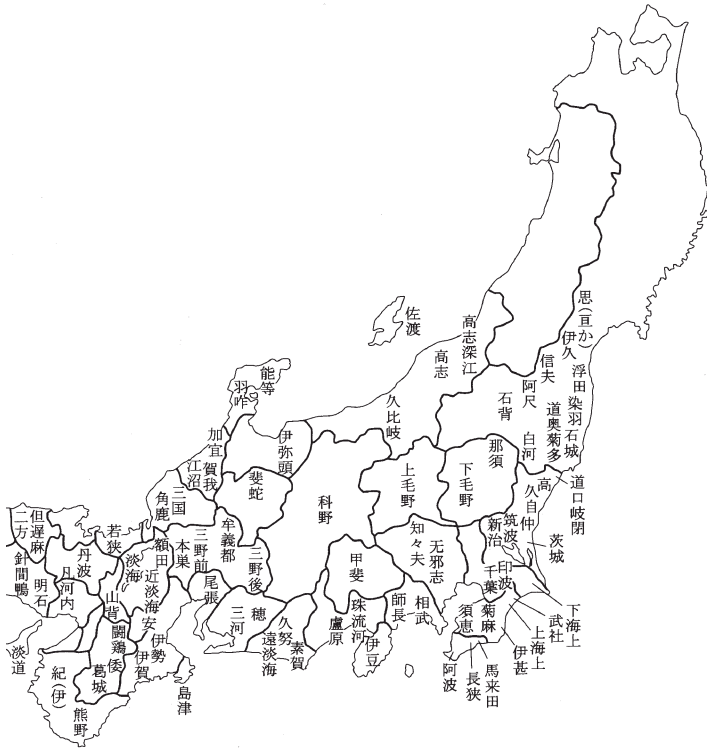


図1 国造設置地域 (河野 2009 より)

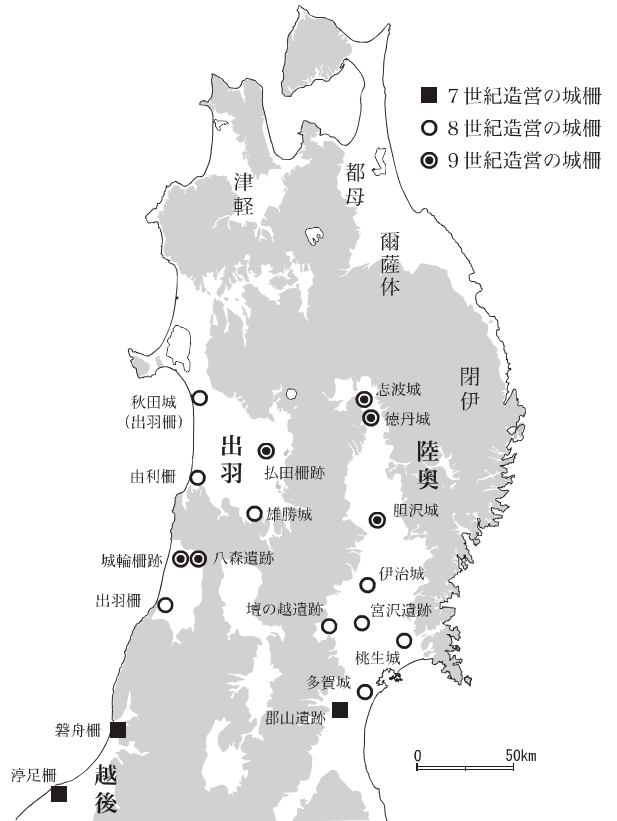


図2 東北地方の城柵 (伊藤 2006 を基に作成)

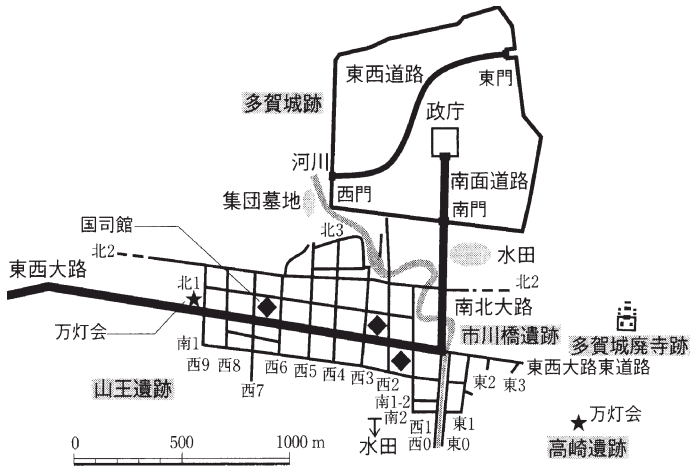


図3 多賀城跡と方格地割り (村田 2015 より, 一部改変)

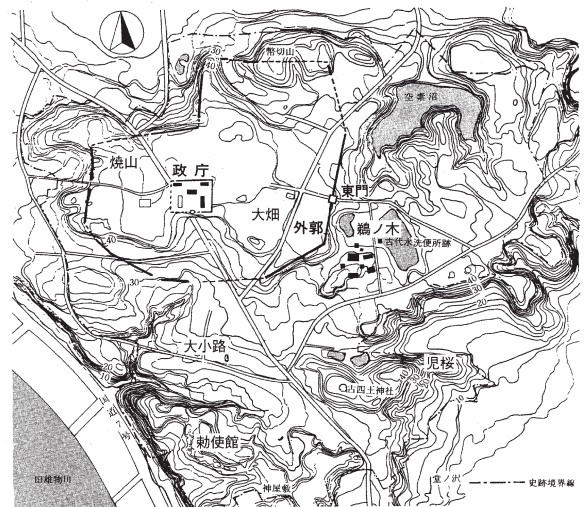


図4 秋田城跡 (伊藤 2006 より)

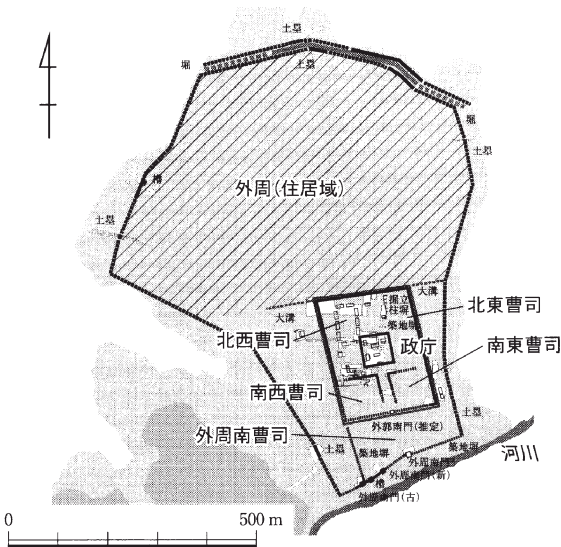


図5 伊治城跡 (村田 2015 より)

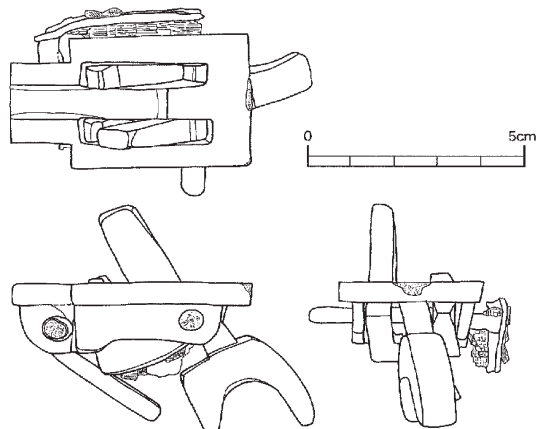


図6 伊治城跡の弩(機)
(築館町教育委員会 2000
より, 一部改変)

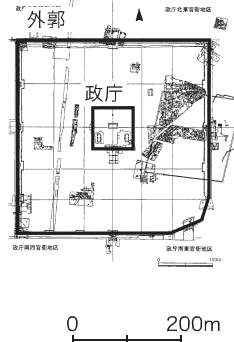
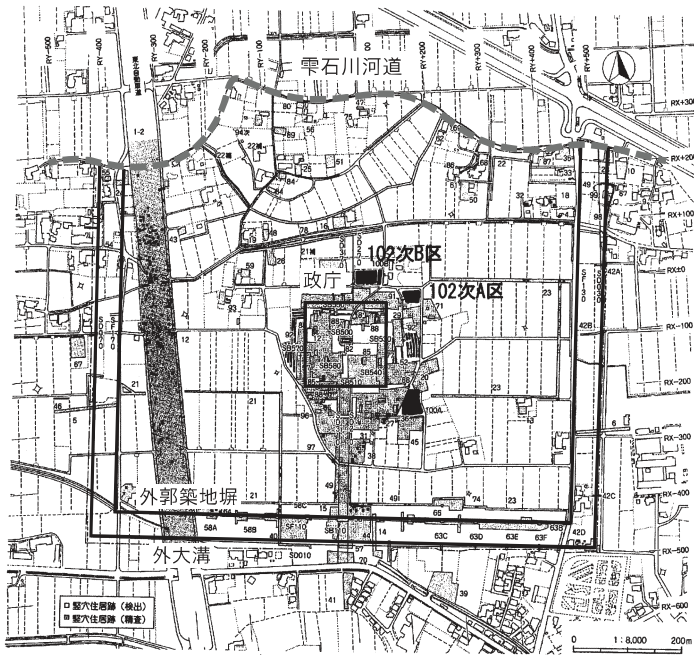


図7 志波城と徳丹城
(盛岡市教育委員会 2009,
進藤 2004 より、一部改変)

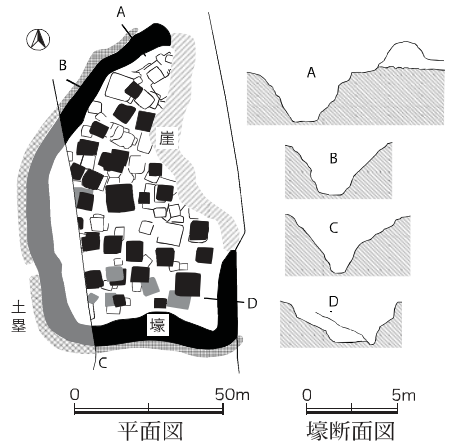
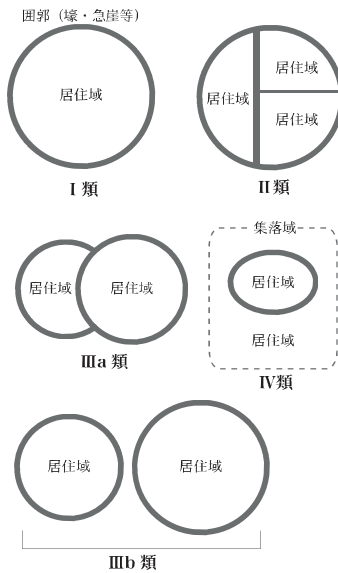
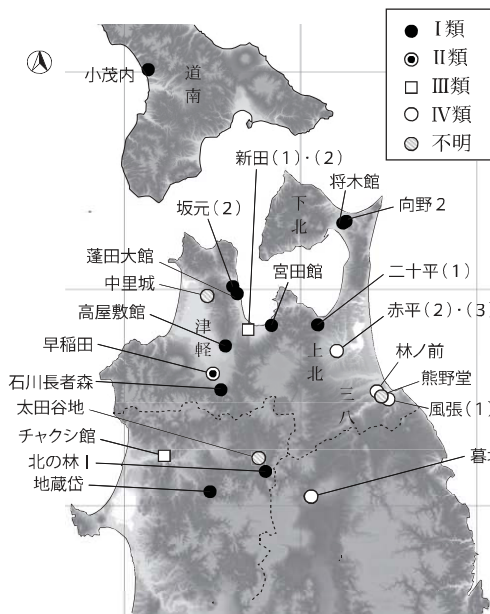


図8 古代末期環壕集落の分布

図9 史跡高屋敷館遺跡

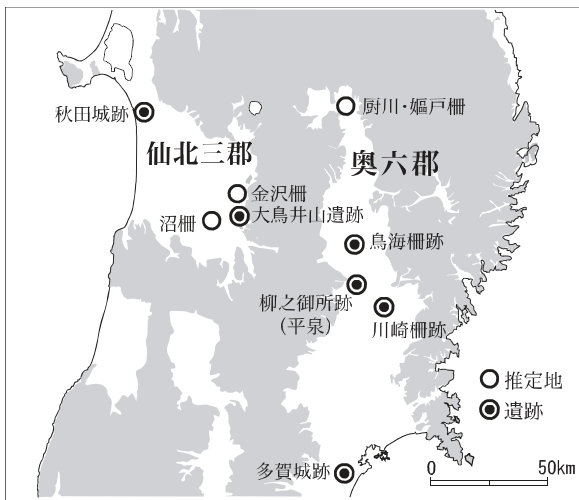


図10 前九年・後三年合戦関連遺跡

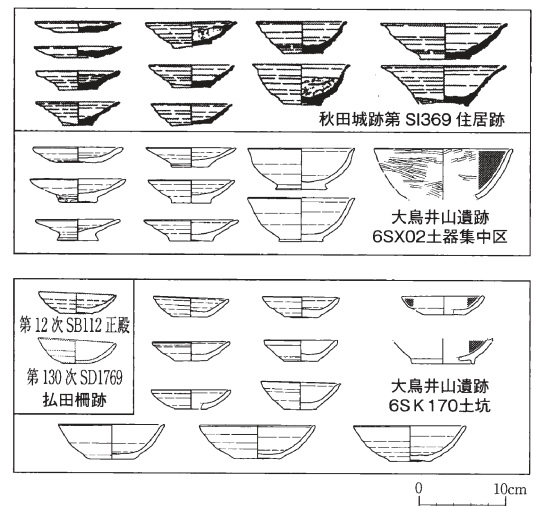


図11 大鳥井山遺跡創建期の土器(島田 2011 より)

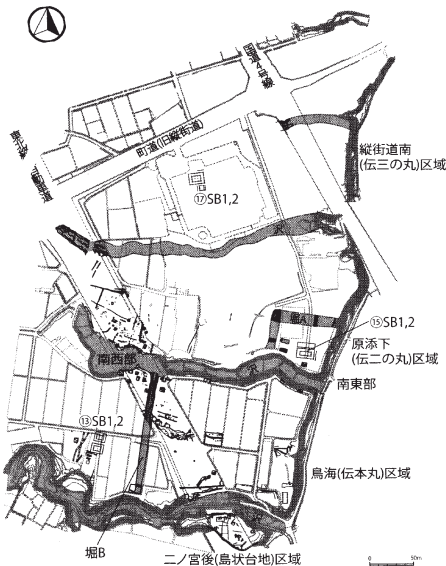


図 12 鳥海柵跡の遺構配置図
(浅利 2011 年より)

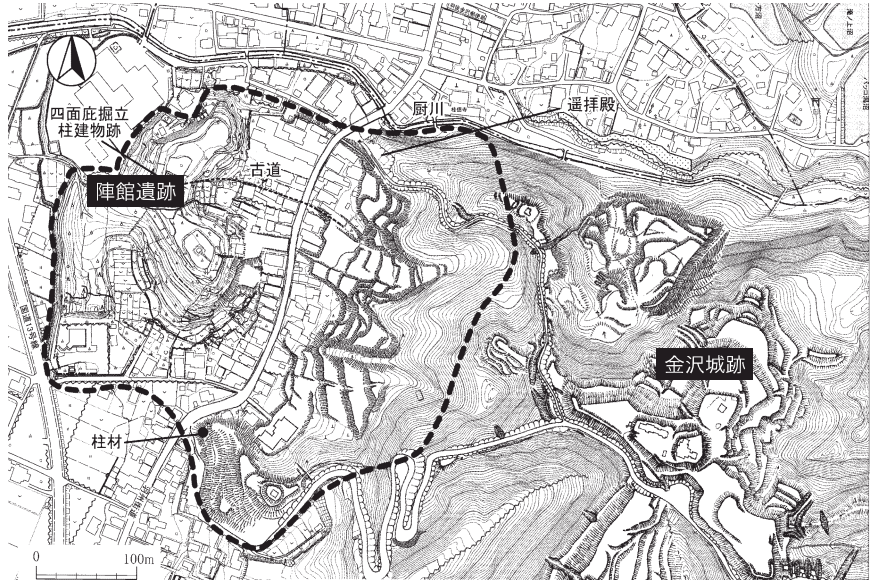


図 13 陣館遺跡と金沢城跡 (横手市教育委員会 2018 年より, 一部改変)

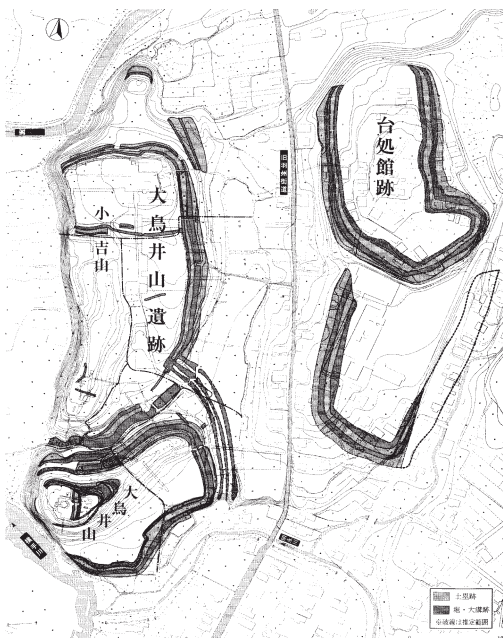


図 14 大鳥井山遺跡 (酒井 2011 年より)



写真 1 大鳥井山遺跡の二重堀・土塁、土橋
(横手市教育委員会 2017 年より)

図版・写真出版

浅利英克 2011 「安倍氏の館・鳥海柵遺跡」『前九年・後三年合戦 -11 世紀の城と館-』高志書院

伊藤武士 2006 『秋田城』同成社

河野一也 2009 「歴史資料としての土師器」『古代社会と地域間交流 - 土師器からみた関東と東北の様相-』六一書房

酒井秀弥 2011 「古代の城から館へ」『前九年・後三年合戦 -11 世紀の城と館-』高志書院

島田祐悦 2011 「清原氏の本拠 大鳥井山遺跡と台処館跡」『前九年・後三年合戦 -11 世紀の城と館-』高志書院

進藤秋輝 2004 「IX-1 城柵」『古代の官衙遺構 II 遺物・遺構編』奈良文化財研究所

築館町教育委員会 2000 『伊治城跡』築館町文化財調査報告書第 13 集

村田晃一 2015 「版図の拡大と城柵」『蝦夷と城柵の時代』吉川弘文館

盛岡市教育委員会 2009 「志波城跡」『第 35 回古代城柵官衙遺跡検討会』古代城柵官衙遺跡検討会

横手市教育委員会 2017 『写真で見る国指定史跡 大鳥井山遺跡の本来の姿』

横手市教育委員会 2018 『金沢城跡』横手市文化財調査報告第 46 集

中世から近世の戦乱

— 築城技術と出土鉄砲玉から考える —

萩原 三雄 (帝京大学文化財研究所 所長・教授)

1. はじめに

中世から近世の戦乱、いわゆる「いくさ」は日本列島全体で100年以上続いていた。この「戦乱」はさまざまな視点から考えることができる。

例えば、「乱取り」の世界と「神と仏の戦い」。

戦乱の主な舞台の一つは、城郭であった。そのために、戦国期の城郭は著しく大規模化し、縄張も巧妙かつ複雑化していった。築城技術は高度に発達し、戦国大名間で特色ある技術が生まれていった。

武器武具類も発達し、特に鉄砲の出現はいくさの戦術を大きく変えた。その状況の一端を城跡や戦場跡から出土した鉄砲玉を通して検討してみたい。

2. 築城技術

戦国大名はそれぞれ特色ある築城技術をもっている。

後北条氏の場合は、堀底に畝状の施設を設けており、特に堀の防備に意を尽くしたり、城郭によって主要街道を封鎖する戦術を得意とする。

一例として三島山中城、甲斐御坂城。

甲斐武田氏の場合、特に虎口の防備に工夫をこらしている。「丸馬出」と「柵形虎口」はその中では特に有名。信濃大島城、駿河諏訪原城、甲斐新府城などは代表的である。

江戸時代初期に成立した軍学書『甲陽軍鑑』には「丸馬出」に関する記述が随所にあられる。

山本勘助「馬だしと申物は、城取の眼にて候」(『甲陽軍鑑』品第二十五)。

こののち、織田豊臣政権によるいわゆる「織豊城郭」が成立する。「織豊城郭」の特色は、「高石垣」「瓦」「天守」。

※東国大名の「土の城」に対して西国大名は「石の城」。

豊臣秀吉の天下統一と同時に、この「織豊城郭」が各地に波及した。

3. 出土鉄砲玉

東国の戦国大名が鉄砲玉に関わってとられた特異な方策。

その一 武田家朱印状

追而就悪銭不足者、来廿五日ニ参府、以誓句可被御申上候也、

鉄砲玉之御用ニ候、悪銭有之儘可被納候、黄金成共郡内棟別成共、望次第ニ可被下置者也、

六月十一日

御室神主

その二 北条氏照朱印状

依天下之御弓矢達、當寺之鐘御借用ニ候、速ニ可有進上候、御世上御静謐之上、被鑄立可有御寄進間、為先此御證文、其時節可被遂被露旨、被仰出者也、仍如件、

天正十六年

正月五日

成木

愛染院

4. 出土鉄砲玉の東と西

① 武蔵八王子城出土鉄砲玉

北条氏照によって築城された東京都八王子市所在の八王子城の「御主殿跡」から礎石をもつ規模の大きな建物跡が数棟のほか、庭園跡などが発見され、その実態が明らかにされている。天正 18 年（1590）、豊臣軍によって落城し炎上した後北条氏の拠点のひとつで、出土遺物も多く、ベネチア産の特殊な磁器類を含めその数は七万点にも及ぶ。そのなかに、鉄砲玉が含まれている。

発掘調査報告書によれば、御主殿跡等から検出された鉄砲玉は 487 点で、化学分析の結果、最も多いのは鉄玉で 453 点、そのほか銅玉 34 点、鉛玉は 1 点も検出されていない。土玉も 163 点ある。これらに混じって鉄砲玉製造のための銅などを多く含む溶解物が付着している埴埦も出土している。鑄型も出土。半鐘片も伴う。ここで目立つのは鉄や銅の鉄砲玉。こうした様子は、後北条氏が寺社に宛てた文書にぴったりとはまる。

② 伊豆山中城出土鉄砲玉

天正 18 年に豊臣秀吉軍に攻められ落城した静岡県三島市に所在している後北条氏の支城のひとつである山中城からも多量の鉄砲玉が出土。主な出土地点は、西ノ丸と西櫓と称されている場所で、196 点の鉄砲玉を発見。最も多いのが鉛青銅玉、すなわち銅玉であり 147 点、次に鉛玉 25 点、鉄玉 19 点で、やはり鉛玉よりも銅玉の方が上回っている。西ノ丸からは、鑄型からはずしたままの鑄張りが付いたものも多く、未使用のまま保管されていたようである。銅、鉛、鉄のそれぞれの鉄砲玉が検出されている状況は、相模の八王子城と類似。後北条氏の鉄砲玉製造と保有のありようを示す。

③ 武田氏館跡出土鉄砲玉

武田氏の場合、甲斐国内での戦闘は少なかったために、出土鉄砲玉に関する良好な事例はないが、本拠地である躑躅ヶ崎館内とその周辺から鉄砲玉が合計 10 点見ついている。内訳は、鉛玉 7 点と銅玉 3 点。本拠地とその周辺らしく鉛玉の量が多いが、相模との国境に近い上野原市で発掘調査された長峰砦跡では、2 点の鉄砲玉を検出、2 点とも銅玉。武田氏の場合も、銅玉が多かったことを示唆。

④ 三河長篠城と設楽が原古戦場出土の鉄砲玉

東の武田軍と西の織田・徳川の連合軍が激突した戦場で、これまで確認された鉄砲玉は 9 点ですべて鉛玉。古戦場で鉄砲を数多く放ったのは織田・徳川連合軍で、それを裏づけている？ 武田軍が攻撃した長篠城跡では出土した鉄砲玉は鉛玉と銅玉が入り混じっている。双方による鉄砲の打ち合いの結果なのか。

⑤ 中世大友府内町遺跡

豊後の戦国大名大友氏の本拠の遺跡。鉄砲玉のほか鉛製インゴット 2 点がある。鉄砲玉はいずれも鉛製で、インゴットは円錐形を呈す。

⑥ 若見迫遺跡

広島県三次市三良坂町に所在する八世紀後半から九世紀前半を主体とする古代の遺跡であるが、混在して鉛製品が検出されている。長さ約 4cm、高さ約 1・5cm のかまぼこ状を呈した鉛のインゴットである。鉛同位体比の分析の結果、朝鮮半島北部の鉛鉱山産で、年代的には古代より年代が下るものと推定。

⑦ 紀伊根来寺遺跡及び和歌山平野

中世末期に高野山から分離して開かれた根来寺は、東西約 3 km、南北約 2 km の規模をもち、多数の僧兵を要していた大寺院。5 点の鉄砲玉と鉛のインゴットが発見されている。出土地は、いずれも根来寺山内で散在的に見ついている。インゴットも含め、いずれも鉛製。根来寺以外の和歌山平野からもこれまでに鉄砲玉や鉛インゴットが多数出土している。いずれも鉛製で、そのなかには鋳型の合せ目が残るものもあることから、製造途中で仕上げがされていないもの。

⑧ 越前一乗谷朝倉氏遺跡

越前の戦国大名朝倉氏の館と城下町遺跡群で、1975 年度に調査された通称「サイゴージ」跡と呼ばれている場所の北側から鉄砲や鉄砲玉関連の遺物が一括して検出されている。黄銅製の火縄銃 2 点、鉄製の埴塙 2 点のほか、鉛インゴット 57 点、大小の鉄砲玉 247 点。この様子から、この場所が鉄砲玉の製作や鉄砲そのものの修理場所であったか、商いを行う商人の屋敷跡の可能性が指摘されている。鉄砲玉はいずれも鉛製。

5. 築城技術と出土鉄砲玉から見える歴史世界

- (1) 中世、特に戦国後半に至ると、戦乱がきわめて激化する。それに応じて各地の城郭も大規模になり、巧妙かつ複雑化する。大名間で特色ある軍事施設も生まれる。武田氏の「丸馬出」はその代表例。しかし、各大名間を乗り越え広域的に波及した軍事施設もある。例えば、「畝状塹堀」などと呼ばれる施設など。

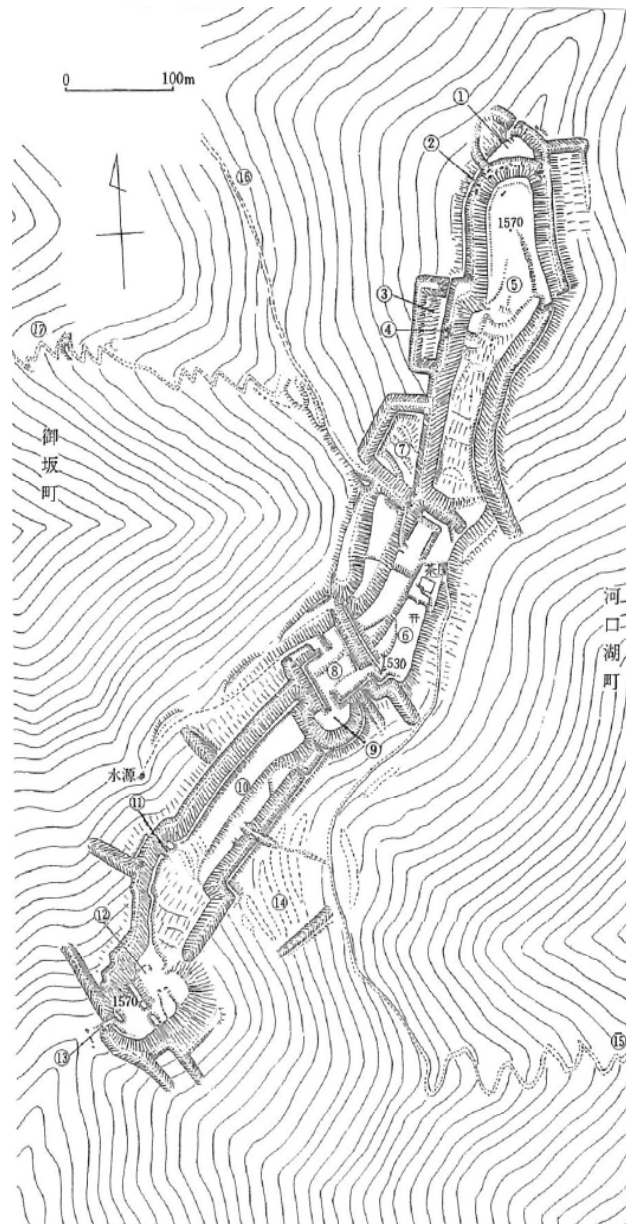
- (2) 織豊政権は「高石垣」「瓦葺き建物」「天守」といった特色ある城郭をつくりだした。豊臣政権の成立と共に各地に波及し、近世城郭が完成した。
- (3) 史料によれば、東国大名の武田氏や後北条氏が鉄砲玉の製造のための鉛の確保に相当腐心した様子が見えるが、その様子は、出土鉄砲玉の素材からも顕著に窺える。東国大名の場合、武田氏も後北条氏も鉛製の鉄砲玉よりも青銅製や鉄製の鉄砲玉の方が多く、しかも土玉もある。鉄砲玉として使用可能なものであればその原料には何にでも求めた感がある。鉄砲玉の原料の確保のために、武田氏や後北条氏などの東国の大名は、その代替え措置として最も身近な存在で、かつ比較的入手可能な「悪銭」や梵鐘を求めたが、これと同様におそらく火薬の確保にも苦労したのではないかと推察される。
- (4) この背後に、鉄砲や鉛、煙硝などの軍事物資の流通を規制している勢力の影をみることはできないか。その結果、最も身近な存在であった「悪銭」や梵鐘にその素材を求めたのは当然であった。
- (5) 出土鉛インゴットの形状は、主に円錐形と半円柱形（棹状）の二種類であった。前者は、タイのソントー鉱山産として知られてきたが、後者は朝鮮半島産の可能性もある。今後の検討課題である。

主要な参考文献

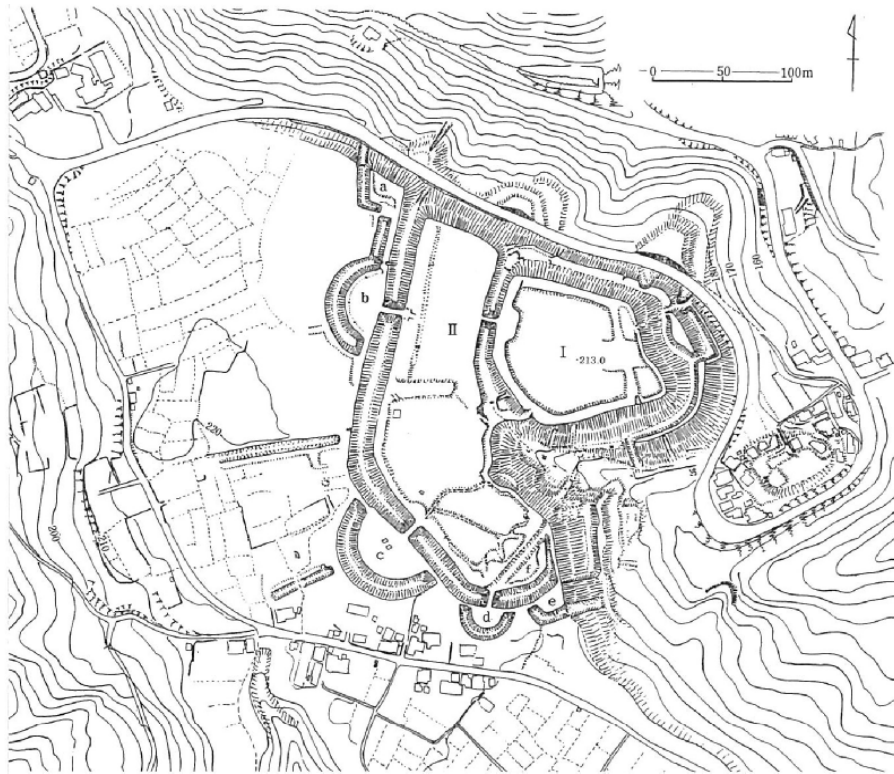
- (1) 山下孝司「長野県・山梨県における丸馬出のひろがり」『第35回全国城郭研究者セミナー「シンポジウム馬出を考える一定義と分布」』同実行委員会・中世城郭研究会、2018。
- (2) 『山梨県史』資料編四、中世二 県内文書、山梨県、1999。
- (3) 『戦国遺文』後北条氏編、第四巻、東京堂出版、1992。
- (4) 八王子市教育委員会『八王子城跡 御主殿跡』2002。
- (5) 小林芳春編『長篠・設楽原の戦い 鉄砲玉の謎を解く』黎明書房、2017、ほか。
- (6) 北野隆亮「根来寺遺跡出土の半円柱形鉛インゴットと鉛製鉄砲玉」『紀伊考古学研究』第20号、2017。
- (7) 『特別史跡 一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告』VIII、福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館、2000。
- (8) 平尾良光「鉛玉が語る日本の戦国時代における東南アジア交易」『大航海時代の日本と金属交易』思文閣出版、2014。



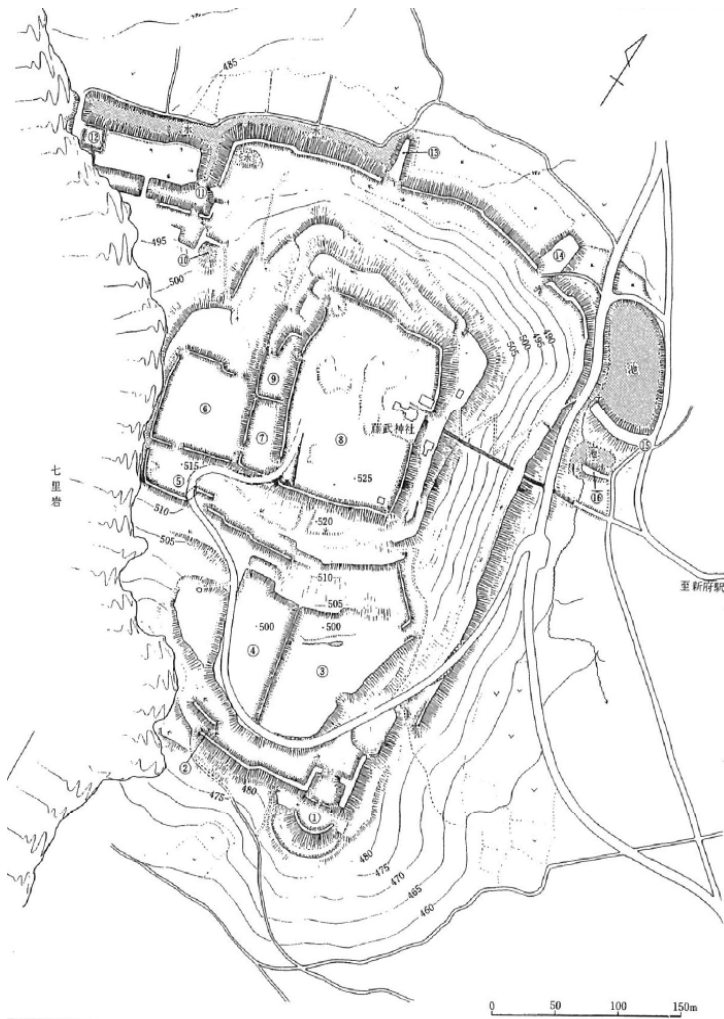
1. 山中城跡の畝堀



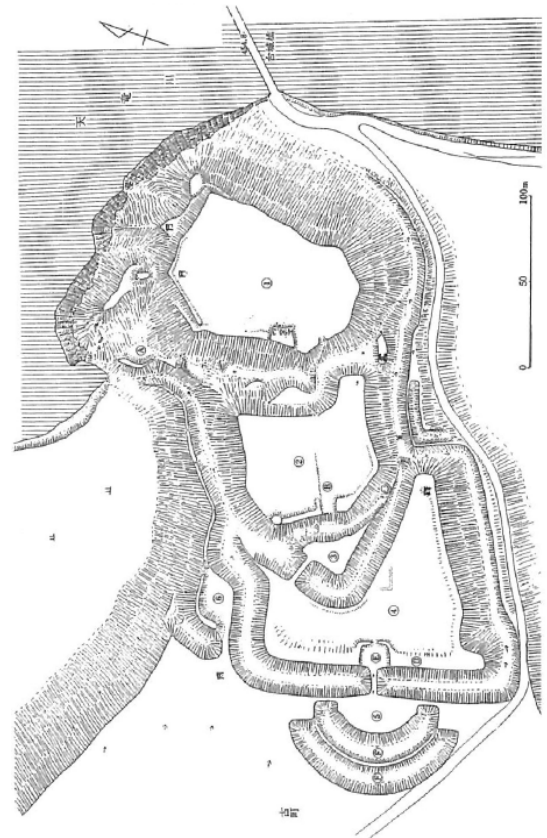
2. 御坂城跡 (村田修三編『中世城郭事典』Ⅱ、1987から転載)



3. 諏訪原城

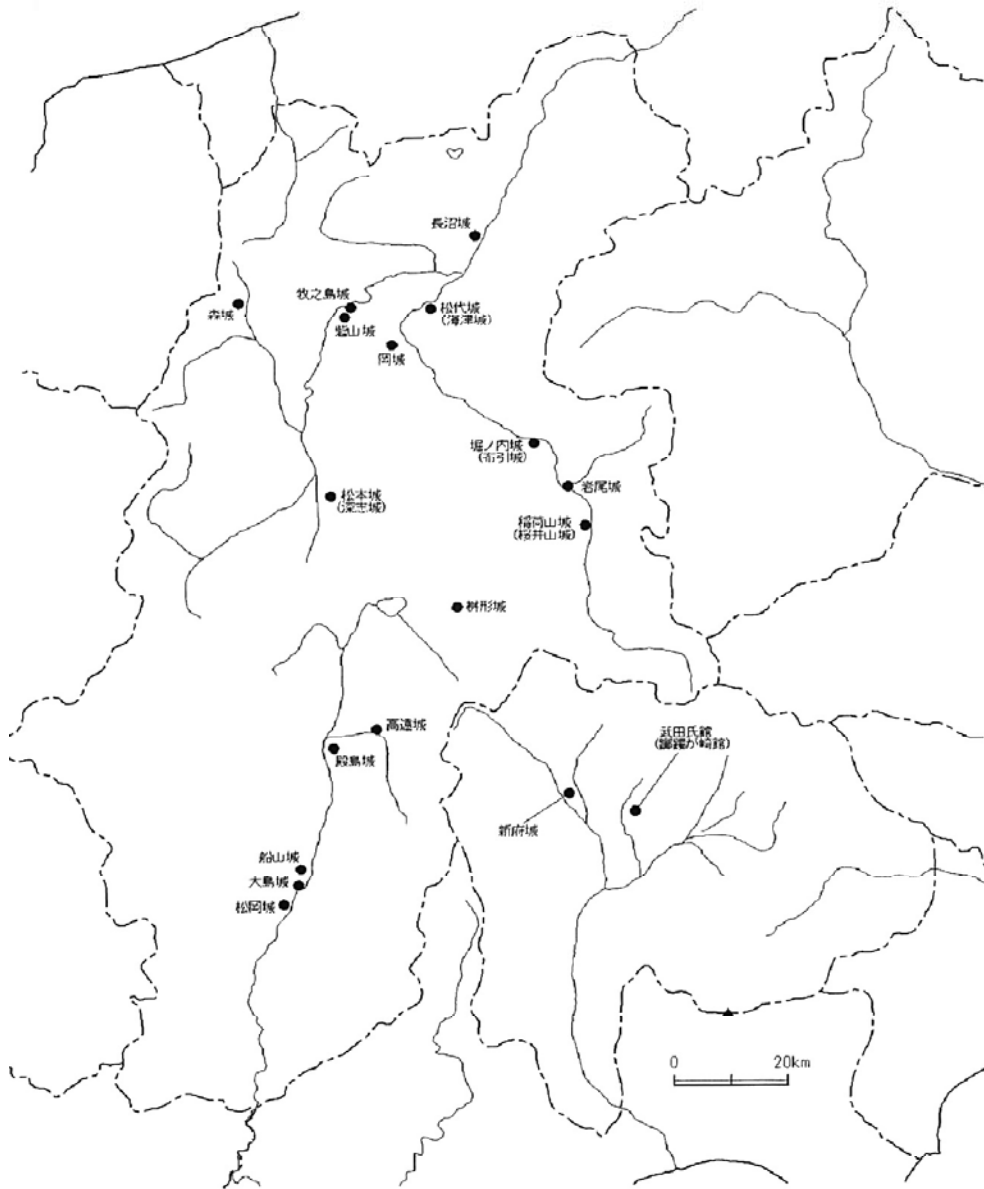


4. 新府城

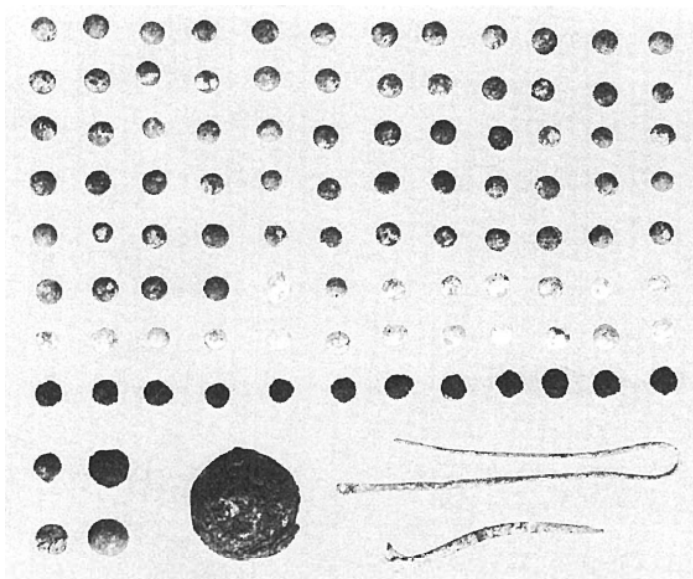


5. 大島城

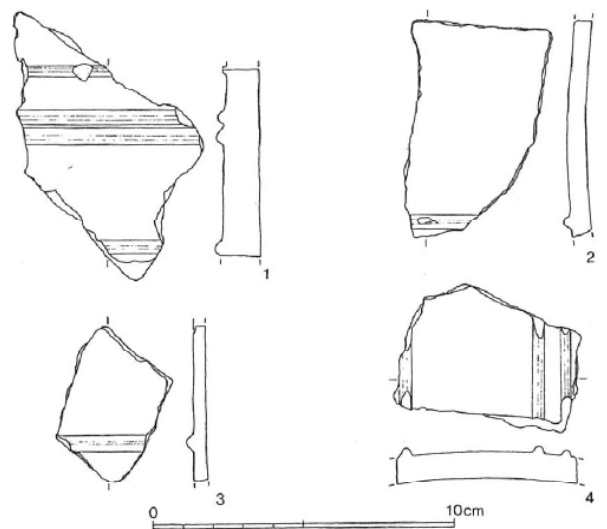
丸馬出の様相 (村田修三編『中世城郭事典』Ⅱ、1987から転載)



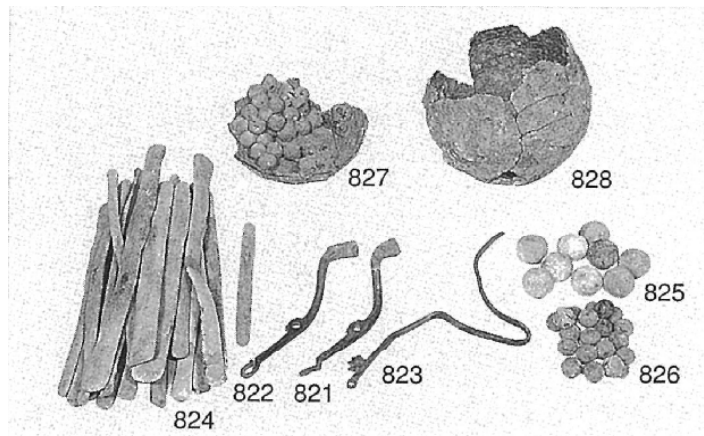
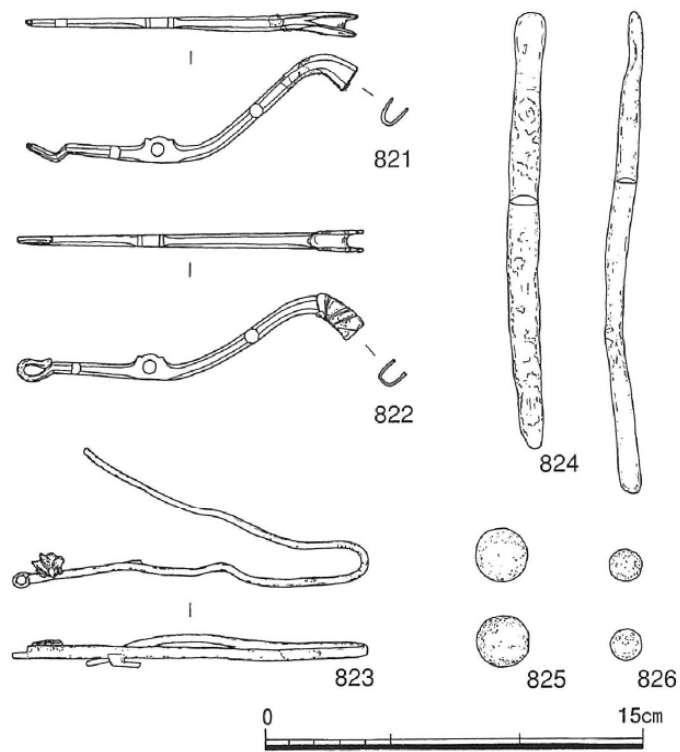
6. 山梨・長野地域の「丸馬出」分布図（参考文献(1)から転載）



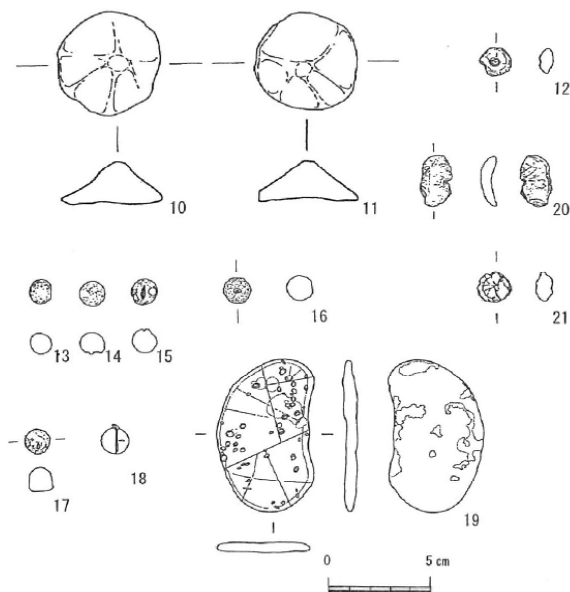
7. 山中城跡出土鉄砲玉（『史跡 山中城跡』1985から転載）



8. 八王子城跡出土半鐘片（参考文献(4)から転載）

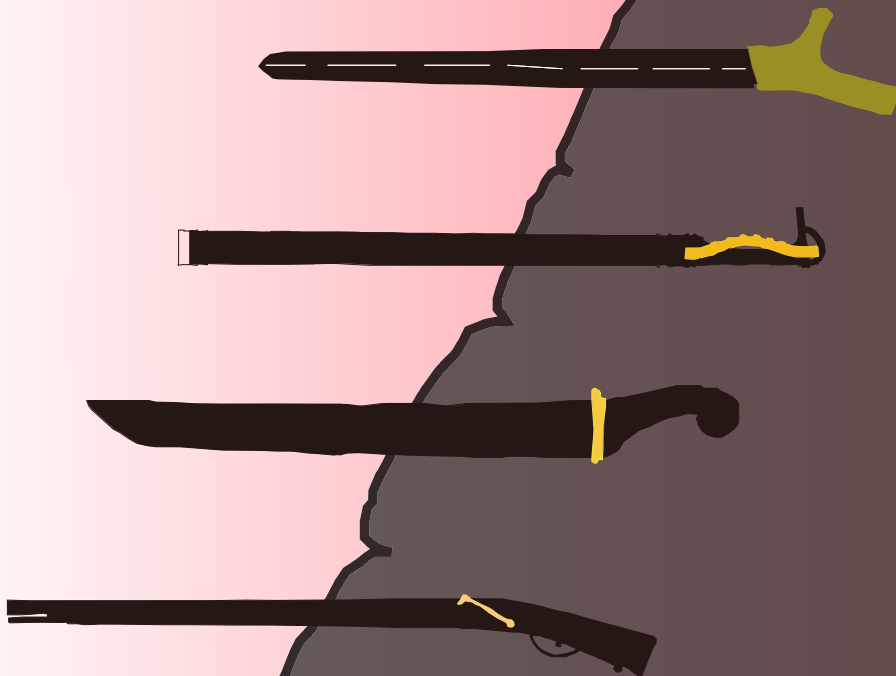


9. 一乗谷朝倉氏遺跡出土鉄砲部品・鉄砲玉 (参考文献(7)から転載)



10. 根来寺・和歌山平野出土鉄砲玉・鉛インゴット (参考文献(6)から転載)

Archaeology of War



平成30年度 考古学ゼミナール 戦いの考古学
平成30(2018)年10月14日

神奈川県教育委員会 生涯学習部 文化遺産課
中村町駐在事務所(神奈川県埋蔵文化財センター)

〒232-0033 横浜市南区中村町3-191-1

電話 045-252-8661 ファクシミリ 045-252-8663